

文部科学省特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」
海外主要オペラ劇場の現状調査、分析比較に基づく、わが国のオペラを
主とした劇場・団体の運営と文化・芸術振興施策のあり方の調査研究

公開講座

＝ オペラ劇場運営の現在・アメリカⅡ ＝
メトロポリタン歌劇場の未来戦略
～メディアと劇場の融合

2007年6月13日（水）14：00～17：00
昭和音楽大学・テアトロ ジーリオ ショウワ

講義録

《オープン・リサーチ・センター整備事業について》

昭和音楽大学舞台芸術センター オペラ研究所では、平成 13 年度より文部科学省「オープン・リサーチ・センター整備事業」特別補助を受け、日本におけるオペラに関する情報収集・発信拠点の整備と強化を目指し、調査研究活動を行っております。

これまで世界の 60 劇場と連携をはかり、オペラ劇場運営に関する最新データの収集と公開につとめ、わが国のオペラ制作と文化振興策について研究してきました。その一環として開催する公開講座では、過去 18 回で、39 名にのぼる国内外のオペラ制作をリードする劇場関係者を招聘し、世界でも類のない試みとして、各界より高い評価を受けています。

《今回の公開講座について》

シリーズ第 19 回目は、世界最大のオペラ劇場の 1 つ、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場総裁のピーター・ゲルブ氏の登場です。同劇場に長年君臨してきたジョセフ・ヴォルピー氏の後を継いで、2006 年 8 月に総裁に就任するやいなや、大胆なメディア戦略を展開し、世界中をあっといわせました。1 週間で 7 公演、土曜日は昼夜 2 公演をこなす、客席数 4,000 の巨大劇場が、今、変わろうとしています。ニューヨークから発信し、世界の音楽市場を巻き込んでいく、その戦略の行く手をたっぷりとお話いただきました。

● プロジェクト研究者 (50 音順) ●

- 五十嵐 喜芳 (昭和音楽大学学長・昭和音楽大学舞台芸術センター オペラ研究所所長)
- 石田 麻子 (昭和音楽大学准教授)
- 上原 恵美 (滋賀県立芸術劇場びわ湖ホール館長)
- 大賀 寛 (日本オペラ協会総監督)
- 小畑 恒夫 (昭和音楽大学教授)
- 黒田 恭一 (音楽評論家)
- 酒井 健太郎 (昭和音楽大学助教)
- 新藤 浩伸 (昭和音楽大学助教)
- 関根 礼子 (音楽評論家)
- 武濤 京子 (昭和音楽大学准教授)
- 寺倉 正太郎 (音楽評論家)
- 中山 欽吾 (財団法人東京二期会常務理事)
- 永竹 由幸 (元昭和音楽大学教授)
- 野村 三郎 (音楽評論家)
- 広渡 勲 (昭和音楽大学教授)
- 古橋 祐 (昭和音楽大学准教授)
- 堀内 修 (音楽評論家)
- 美山 良夫 (慶應義塾大学教授)
- 山崎 裕視 (昭和音楽大学講師)
- 渡辺 裕 (東京大学大学院教授)
- 渡辺 通弘 (昭和音楽大学名誉教授)

公開講座

＝オペラ劇場運営の現在・アメリカⅡ＝

メトロポリタン歌劇場の未来戦略

～メディアと劇場の融合

講師

ピーター・ゲルブ（メトロポリタン歌劇場総裁）

Peter Gelb / General Manager of Metropolitan Opera

冒頭挨拶 下八川 共祐（東成学園理事長）

講師紹介 広渡 勲（昭和音楽大学教授）

第Ⅰ部 基調講演

第Ⅱ部 質疑応答

モデレーター 黒田 恭一（音楽評論家）
広渡 勲（昭和音楽大学教授）
石田 麻子（昭和音楽大学准教授）

通訳 井上 裕佳子

総合司会 武濤 京子（昭和音楽大学准教授）

後援：アメリカ合衆国大使館

目 次

講義録編

第Ⅰ部 基調講演	5
----------	---

第Ⅱ部 質疑応答	27
----------	----

資料編

公開講座での上映映像一覧	34
--------------	----

メトロポリタン歌劇場について	35
----------------	----

メトロポリタン歌劇場〈新たな観客創出の挑戦〉	36
------------------------	----

メトロポリタン歌劇場 2007/2008 シーズン・プログラム、座席表と入場料	38
---	----

メトロポリタン歌劇場 2007/2008 シーズン新制作&レパートリー作品	42
---------------------------------------	----

MET ビューイング特別試写会《外套》 出演者とあらすじ、みどころ	44
-----------------------------------	----

出演者プロフィール	47
-----------	----

第 I 部

基調講演

【司会】 本日は、文部科学省特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」の公開講座によるこそお越しくございました。

本日は、去年の8月に就任されたばかりで、革新的なメディア戦略で世界中から注目を集める、メトロポリタン歌劇場の総裁ピーター・ゲルブさんにお話しいただきます。

タイトルは、「メトロポリタン歌劇場の未来戦略～メディアと劇場の融合」です。第Ⅰ部を基調講演、第Ⅱ部では、第Ⅰ部に基づく質疑応答の形をとらせていただきます。通訳は井上裕佳子さんです。第Ⅱ部の質疑応答では、皆様からの質問にも基づいた形をとっていきたいと思います。お手元の資料の中に、質問記入用紙がございます。ご質問等のある方は、ご記入いただき係の者にお渡しください。参考にさせていただきながら、第Ⅱ部質疑応答のセッションに入りたいと思っております。

そして、終了後、メトロポリタン歌劇場、松竹株式会社のご提供により、メトロポリタン歌劇場でこの4月20日初日を迎えたばかりの新制作、プッチーニの3部作より《外套》をお送りします。お時間のある方は、そちらもお楽しみください。それでは、講座に入る前に、昭和音楽大学の下八川共祐理事長よりごあいさつ申し上げます。

【下八川】 本日はピーター・ゲルブさんの公開講座によるこそおいでいただきました。

昭和音楽大学オペラ研究所では、文部科学省特別補助によるオープン・リサーチ・センター整備事業を7カ年にわたり進め、これまで19回のシンポジウムを行ってまいりました。当初は何十名かの集まりでしたが、このように1,000人余りの方々にご参集いただけるようになりました。ほんとうにありがとうございます。これは、今までこの調査・研究に携わっていただいた諸先生方、特にきょうご出席の黒田恭一先生をはじめ、学外の研究員の皆様方のおかげだとも思います。

きょうは、アメリカ合衆国大使館のご後援により、ニューヨークのメトロポリタン歌劇場ピーター・ゲルブさんをお迎えすることになりました。メトロポリタン歌劇場総裁としては、初めてのシーズンを終わられたばかりのゲルブさんに、どのようにあのような大きな歌劇場を運営されているのか、これからの戦略をどのようにされるかを伺えると思います。長時間にわたりますが、最後までごゆっくりお聞きいただければ幸いです。ありがとうございました。

【広渡】 皆様、こんにちは。私はオープン・リサーチ・センター整備事業の研究総括という、いわばプロデューサー的な役割を担当しております、昭和音楽大学の広渡です。よろしく願いいたします。

さて、ことしの2月ですが、世界中のオペラ関係者が一堂に集うオペラ・ヨーロッパという国際会議がパリのオペラ座で開催されました。偶然にも、私は、そこでゲスト・スピーカーとして発言する機会を与えていただいたのですが、そのゲスト・スピーカー席の隣に、きょうお招きしたピーター・ゲルブさんが座っておいでになりました。これもきっと神様のお引き合わせだと思ひまして、このチャンスを逃すことはない、そこでいきなり直談判でこの講演のお願いをしましたら、快く応じていただき、きょう、こういう会が持てるようになりました。

それでは、始める前にゲルブさんのプロフィールを紹介させていただきたいと思ひます。ピーター・ゲルブさんは、昨年8月にメトロポリタン歌劇場（以下MET）の総裁に就任されたばかりですが、このわずか1年足らずの間に、METは大きな変化を遂げました。芸術面だけでなく、聴衆へのアウトリーチ活動や、新たなメディア戦略としてハイ・ディフィニションという高画質・高音質での配信活動を始めて、日本でも歌舞伎座をはじめ色々なところで上映されていますので、既にごらんになった方もいらっしゃると思ひます。

その成功に触発されて、世界のほかの芸術団体も、より広く聴衆に届けるために、メディアを活用し始めています。例えば、アメリカでは、ワシントン・オペラWashington National Operaとフィラデルフィア管弦楽団The Philadelphia Orchestraが、各地の大学に向けたライブ演奏を配信する計画を進めているそうです。また、ウィーン国立歌劇場Wiener Staatsoperが、シュテファン広場での配信を計画し始めていますし、ロイヤル・オペラハウスRoyal Opera HouseはDVDの制作会社を、膨大なカタログとともに獲得したそうです。

さて、クラシック音楽の世界でのゲルブさんのキャリアは、十代のころMETの場内案内係として始まり、さまざまな経験を積まれた後に、METのトップまで上り詰められました。これまで広報、マネジメントのほかに、フィルム、録音、ラジオ、テレビ、コンサート、オペラ、音楽祭のプロデューサーなど、大変多くの仕事をされています。

また、ゲルブさんは、世界の偉大な芸術家たちとも仕事をされています。ヘルベルト・フォン・カラヤンHerbert von Karajan、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチMstislav Rostropovich、ヴラディーミル・ホロヴィッツVladimir Horowitz、ルチアーノ・パヴァロッティLuciano Pavarotti、キャスリーン・バトルKathleen Battle、ジェシー・ノーマンJessye Norman、ヨーヨー・マYo-Yo Ma、クラウディオ・アバドClaudio Abbado、ウィントン・マルサリスWynton Marsalisなど、そうそうたる顔ぶれです。

また、ゲルブさんがボストン交響楽団Boston Symphony Orchestraのアシスタント・マネジャーをされていた時代に、小澤征爾さんとの出会いがありました。ということもあって、2008年と2009年のシーズンに、小澤さんをMETに招かれる計画もあるそうです。さらに、日本ではサイトウ・キネン・フェスティバルのために、1992年にミュージカル《ライオン・キング》の演出で有名なジュリー・テイモアJulie Taymorさん演出の《オイディプス王》を、それから、1994年にロベール・ルパージュRobert Lepage演出の《ファウストの劫罰》を制作されています。また、1995年からゲルブさんは、クラシック音楽レコードの最大手であるソニー・クラシカルSONY CLASSICALの社長も務められています。

こうしたプロデューサーとしてのゲルブさんのお仕事には、多くの名誉ある賞が贈られています。それでは、これから皆様にプロデューサーとしてのゲルブさんのキャリアのハイライトを映像でご紹介させていただきたいと思います。

(上映①『ピーター・ゲルブ・プロダクション』P34参照)

【ゲルブ】 こんにちは。今皆様のごらんになった抜粋は、私の長年のキャリアの中から選んだものです。

ですけれども、皆様が最近よく耳にするハイビジョンの世界になる前の作品です。これらは、芸術的に、そしてまた、人間的、精神的にも素晴らしい価値のあるものだと思いますが、やはり近年の技術が私たちにもたらした新しいメディア戦略には、まだ到達していなかった時代のことです。私の話の中で、皆様に今の新しいメディアというものを、少しずつ、ごらんになっていただきたいと思います。

それでは私の話を始めますが、何よりも一番最初に、今回のレクチャーを実現してくださった昭和音楽大学、そして下八川理事長、広渡先生に心から御礼を申し上げます。

さて、この場で私はこうやって皆様の前にさまざまなMETの変革をご紹介できることを、非常にうれしく思っています。今、METでは、必要とされていたさまざまな変革が行われており、この影響が世界中のオペラの世界に広がっています。METというのは、もともと非常に保守的な団体というイメージがあまりにも強かったので、これらの変革はパフォーミング・アーツの世界で非常に大きな波紋を呼んでいます。私たちが過去にはあまりにも保守的で、大きな組織でしたので、それが変われるということは、やはりほかの大きな団体にとっても、自分たちも何か変われるのではないかという新しい期待につながっているようです。

やはり変化というものは必要とされています。世界中のオペラの聴衆は、どんどん年齢

層が上がっており、数も減ってきています。今、皆様にごらんになっていただいた抜粋は、私の人生にとってとても意味があるものです。これにプロデューサーとして非常に綿密にかかわったからです。

ある意味で、今回、日本に来ることも、私にとってはとても意味があることです。考えてみると、私は30年ほど前、1978年、ボストン交響楽団のアシスタント・マネジャーをしていたときに、指揮者の小澤征爾に付いて初めて来日しました。

そして、広渡先生からご紹介がありましたように、私のキャリアの中では、偉大なアーティストとのお仕事大きな位置を占めています。今、私はMETの総裁をしていますが、アーティストと仕事をしたことは、歌劇場で働く準備としては最高のトレーニングだったのではないかと思います。オペラハウスのすばらしい声楽家たちもやはりアーティストだからです。アーティストというのは、それなりの性格、気質がありますので、プロデューサーやマネジャーとしてこの偉大な方たちとお仕事してきたことは、オペラハウスを運営していくには必要な準備だったのだと思います。

もちろん、私がお仕事をさせていただいたアーティストの中で最も偉大な性格、個性を持っていたのが、マエストロ・ウラディーミル・ホロヴィッツです。私は彼が亡くなるまでの7年間、マネジャーを務めていました。私が彼のマネジャーになったのは、日本に来る直前だったのです。実は、この1982年のホロヴィッツの初来日の頃、彼のキャリアは下り坂に入っておりました。彼は健康を害し、そして、今まで飲まなかったお酒に浸るようになり、たばこを吸うようになったのです。ですが、彼は日本に来ることを合意しました。なぜかという、音楽史の中で最高のギャランティに惹かれたからでした。実際、来日したときには、本当に大歓迎されて、ホテルオークラも、彼とその周りの人たちのためにpenthouseの部屋の改築をしなければいけない状態でした。

そして、待ち望まれたコンサートをNHKホールで行ったのですが、これは多分彼の一生の中でも最悪の演奏でした。コンサートが終わったとき、彼は私に言いました。「もっと日本にいて、もっとここでコンサートをしたい」と。そのとき初めて私は、当時、評論家の吉田秀和先生が朝日新聞に書いた批評の翻訳を彼に渡しました。「ホロヴィッツはもう壊れてしまった骨董品のようなものである」と書かれていたのです。彼はそれでショックを受け、ニューヨークに戻り、もう自分はリタイアをして、二度とピアノは弾かないと誓いました。1年ぐらいたって、やっぱりピアノを弾こうかなという気になって、そのときにお話のあったモスクワでのコンサートに合意して、今でも歴史的な映像として残っている、モスク

ワのカムバック・コンサートを実現しました。

実際にこのコンサートが行われたのは冷戦の真ただ中でしたが、そのコンサートを実現するために、私はホロヴィッツのマンションをそのままモスクワに再現することを約束し、また、彼の食生活もそのままモスクワで実現すると約束しなければいけませんでした。彼のエキセントリックな部分は、なかなか周りの方には理解していただけなかったようです。例えば、1つの例ですが、彼はこの食事と決めたら、毎食変わらず同じメニューを食べ続けるという癖がありました。そのとき彼が気に入っていたのが、ドーバーのヒラメとアスパラガス、それのみだったのです。当時はモスクワでヒラメとアスパラガスを手に入れるなどというのは本当に不可能であり、ポテトを食べられただけでも幸せだと思わなければいけない時代でした。ですが、モスクワにあったアメリカ、イギリス、そしてイタリア大使館のおかげで、彼の食事がそこで実現できたのです。イギリス大使の方がヒラメをイギリスから空輸し、イタリアから毎日フレッシュなアスパラガスを空輸いたしました。この食事に満足したホロヴィッツは、歴史的にすばらしいコンサートを終えたのです。ホロヴィッツは、満足して私に言いました。「私は日本に行って、やはり汚名返上しなければいけない」と。そして、それを実現したのです。

私がMETの総裁にならないかと最初にオファーをいただいたのは、2004年の秋でした。当時、私はソニー・クラシカル社長の務めていたのです。当時METは、アメリカで最大のオペラハウスでしたし、世界の中でもトップの1つに数えられるオペラハウスでした。ですが、状態としては、やや下りぎみであったと思います。聴衆の皆様の年齢層がどんどん高くなり、足を運ぶお客様の数も減っていました。9月11日のテロ以降は、お客様の数が激減しました。私がMETの役員の皆様にお会いしたとき、彼らが面接をした最後の候補だったそうです。私が役員の方にお話をしたのは、METが一般の世界からは孤立してしまっている。一般の人の現代の生活に懸け橋をかけて、そのコネクションを強化しなければいけないということでした。私がMETの批判をしたからでしょうか、このポジションをいただくことになったのです。

この職を私が受けた後、友人たちには「あなたはクレージーだ」と言われました。彼らは間違っていなかったかもしれませんね。実際、私はこの職について、話が決まってから、過去5年間の聴衆の皆様のアンケートの結果を初めて見せられたのです。そのときに私の心配していたことが明確になりました。というのも、METに来ているお客様の平均の年齢が65歳だったのです。私をもっと気になったのは、5年前のアンケートでは、その平

均年齢が60歳だったことです。私は数学はそれほど得意ではありませんけれども、いいトレンドではないということだけはよくわかりました。

ですから、私がこの仕事に取りかかるときには、お客様の数を増やすだけではなく、その平均年齢を下げようと決めました。それを実現するために、私は気がつきました。METの総裁になるためには、自分自身がプロデューサーにならなければいけないと。プロデューサーとして、芸術面だけではなく、ビジネス面も自分で考えなければいけないと思いました。METのような大きな組織は、博物館のようにキュレーターがただ管理をしているだけではだめだと思ったからです。そこで必要としていたのは、音楽と劇の非常にダイナミックな融合でした。その融合を達成することにより、若い層の方たちも刺激を受け、聴衆の平均年齢がどんどん下がると私は信じたのです。

私のそれからのチャレンジというのは、もちろん、そこに既存していたすばらしい基礎のもとにつくられていました。オペラ史的にもすばらしい指揮者であるジェイムズ・レヴァインJames Levine氏がそこに既にいたわけです。オペラの世界の中でも皆のねたみの種となるすばらしいMETのオーケストラがあり、それはもちろんマエストロ・レヴァインが35年をかけて磨き上げたすばらしいオーケストラなのです。もちろんMETで歌うすばらしい声楽家たちの数々、そして、合唱団もあります。私が新しい芸術的なイニシアティブを実現するために、すばらしい基礎がもう手元にあったのです。

私の芸術的な使命というのは、この音楽的水準に匹敵するぐらい高い劇的な水準を築くことでした。そうすることにより、METがより幅の広い年齢層の方たちに関心を持ってもらえるような団体になること、と同時に、今までファンとして私たちを支えてくれた年齢層の上の方たちにもやはり満足していただくものを提供しなければいけませんでした。それまでのMETのファンというのは、チケットを買ってくれるだけではなく、いろいろな寄附もされるような方たちでした。そういう年上の方たちは、何かが変わることに対して、かなり抵抗を感じられていたようです。

ですが、私としては、METを活性化させるために、新しいアクション・プランをどうしてもつくらなければいけませんでした。私が後任になることが発表されてから6カ月たち、私はMETのステージの上で記者会見をさせていただき、今後のMET像を発表させていただきました。そのときの私のプランというのは、7点ありました。

まず1点目は、人々に気楽にオペラを楽しんでいただけるような教育プログラムです。それはもちろん歌劇場の中だけではなく、外にも出かけていって実施すること。ですが、

もちろんこれはそれまでの芸術的水準を維持することが条件です。

2点目は、新制作を増やし、演劇などの演出で非常に有名な新しい方たちをどんどん起用することでした。それまでは年に4つの新しいプロダクションが紹介されていたものを、倍の1年に8作品に増やしました。実際、2009/2010年のシーズンは、私とジェイムズ・レヴァイン2人だけで完全に企画した1年目のシーズンになりますが、そのときには年に8つの新しいプロダクションを皆様に楽しんでいただけます。ヨーロッパの場合は、大抵インテンダントが新しく起用されると、いろいろな自分の企画を持っていて、3～5年前から企画が動き始めます。ですが、私の場合はそうではなく、入ってからそういうものが徐々に実現されていく状態にあります。もちろん、前からの企画がいろいろと決まっていたにもかかわらず、どうしてもあちらこちらに手を加えてしまいましたが。

3点目は、1シーズンの中に、以前と比べてもっと多く、すばらしい声楽家の方たちに参加していただく演目の数を増やすことです。そして、毎年、現代作品を取り入れることを皆様にお約束しました。

4点目に、リンカーン・センター・シアターと共同で新しい作品を委嘱していく、というプランも発表させていただきました。

5点目は、年末のホリデー・シーズンに向けて、皆で楽しめるようなプロダクションも提供していく。これは英語バージョンで上演され、第1作目がジュリー・テイモア演出の《魔笛》でした。

6点目は、メトロポリタン歌劇場とコンテンポラリー・アートの世界のつながりを強化することです。

7点目が、現代メディアのテクノロジーを使って、MET作品のライブ、また、古いアーカイブを世界中の皆様に楽しんでいただくということでした。これは何を意味するかというと、METの中に存在する16の組合とメディアの関係を全部交渉し直さなければならないということでした。その組合も、大きさは、例えば、舞台スタッフなどは数百人のメンバーがいますし、一番小さなところでは、METの前のポスターを張る方1人の組合もあります。ですが、アメリカの労働省のように、代表が3名いるところもあったわけです。METでは、1,500人が働いています。私が出たような発表をしたら、すぐに聴衆やメディアの皆様からの反応がありまして、そういうことが実現できるのかどうか非常に疑われました。

実際、私の前任者のジョセフ・ヴォルピー Joseph Volpeの最後の1年、私は彼とともに

仕事をしていたのですが、どうやらニューヨークのマスコミは、私と彼との間がどのよう
にうまくいっているのか、いっていないのかのほうに興味があったようです。私たちの仕
事の仕方があまりにも違っていたからでしょう。ヴォルピーさんの逸話で非常に有名なの
があります。ある有名な声楽家の方が、かつらの色が気に食わないと言ったときに、「この
かつらはあのステージの上に出るのだ。君がかぶるか、別の人がかぶるかは、僕が決める」
と。私の場合だったら、多分、その方の好きな色のかつらにさせたと思います。

私が総裁になったのは昨年8月1日です。私はすぐに自分のプランを実行しました。M
ETの活性化をどのように実現したかをお話したいと思います。

まず、METの一番安いチケットを、25ドルからさらに引き下げ、15ドルにしまし
た。平日には、特に安価なラッシュ・チケットRush Tickets (P36参照) というものも設
けました。そのために私たちの役員の1人でもある方に、実際に100ドルの席を200
万ドル分買ってもらうことが必要になりました。それによって、月曜日から木曜日の間、
100ドルのチケットを20ドルで皆様にご買っていただけるような席を設けたわけです。
その結果、月曜日から木曜日は、METの前に、100ドルの席を20ドルで見ようとい
う人たちの列ができるようになりました。実際に、この1シーズンを通して、私たちは2
万枚のチケットをこのような形で提供することができました。

アンケートでわかったことなのですが、このラッシュ・チケットを買われている方たち
の32%は、実はオペラを一度も見たことがないという方たちでした。このオペラを見た
ことがないという方たち、その半分が30歳以下の方たちだったのです。

また、METの歴史の中でも初めてゲネプロを無料で皆様に見ていただくようなプログ
ラムを設定しました。私たちは堅苦しさを取り除き、フレンドリーな組織であるというこ
とを皆様にご知っていただきたかったのです。優美な部分を残し、エリート意識を取り除き
たかったのです。

私たちは現代アートも重要視したかったので、その関係を強化するために、1階にコン
テンポラリー・アートのギャラリーを設けました。METのシーズンにインスピレーショ
ンを受けた作品をみんなにつくっていただくことを提案したのです。チャック・クロース
Chuck Close、リチャード・プリンスRichard Prince、ジョン・カレンJohn Cullen、そし
て、日本の作家・工藤麻紀子さんなどにもお願いしました。私が再現したかったのは、
1960年代から1970年代、やはりアーティストたちとのコラボレーションがあった
時代です。皆様ご存じのとおり、METにはマルク・シャガールMarc Chagallの天井画が

ありますが、ああいうものが中心的な存在であった時代の雰囲気をも再現したかったのです。デイヴィッド・ホックニーDavid HockneyもMETで背景をつくっていた時代がありました。

実際にこのコンテンポラリー・アーティストたち、そしてまた、さまざまな演劇の演出家たちとの良好な関係が、1940年から1960年代のMETの地位を確立させたのです。私は、そういうMETの位置づけを再現したいという思いがありました。私たちは《マダム・バタフライ》でシーズンをオープンしましたが、このプロダクションはイングリッシュ・ナショナル・オペラEnglish National Operaとの共同制作でした。これは私個人の意味で、1年のシーズンにプログラムとして足したものです。演出は演劇や映画『イングリッシュ・ペイシェント』『コールド・マウンテン』などの監督作品でも非常に有名な、アンソニー・ミンゲラAnthony Minghellaです。この舞台は非常にきれいで清潔感があり、現代的で、今までのMETにはないような雰囲気を醸し出していたと思います。

METは20年間、新しいプロダクションでシーズンの幕を開けることがありませんでしたので、これを変えなければいけないと私は思いました。1980年代にさかのぼりますが、ルチアーノ・パヴァロッチィとプラシド・ドミンゴPlácido Domingoが絶好調のころ、METはどうかこの両者が一晩、オープニングの日に歌うことを実現し、それがなぜか方程式のようになっていたのです。ですが、これを実現するためには、いろいろなオペラの抜粋を紹介しなければいけませんでした。もちろん、パヴァロッチィとドミンゴという素晴らしいアーティストたちがピークにあったときは、これもよかったのかもしれませんが、私がこの職に就任したときには、少し古い考えになっていました。

そして、私が就任して初めてのシーズンということで、《蝶々夫人》のオープニングのゲネプロを一般公開しました。5,000人の方たちが、無料でそれを見ようと、METの前に列をなしました。そのゲネプロをごらんになったすべてのお客様に、リハーサルの後、METのステージはどのようなものか、実際に歩いていただいたのです。彼らはもちろん大喜びでした。また、ほかのパトロンのおかげで、私たちは《蝶々夫人》のイメージを、さまざまなバス、地下鉄の入り口、そして、街灯に張ることができました。METというのは本当にひそやかな存在で、自分から広告を打つことを今までしていなかったのです。

オープニングの際には、演劇、音楽の世界、そして、映画の世界のセレブと言われている方たちをご招待しました。この方たちはアンソニー・ミンゲラに敬意を表して、オペラにおみえになったのです。

さらに、オペラがもっと一般市民に知られるべきだということで、ニューヨーク市長からは、この《蝶々夫人》をタイムズ・スクエアで上映していいという許可をいただきました。タイムズ・スクエアというのは、ニューヨークにとって、まさに心臓部分です。市長のおかげで、タイムズ・スクエアの一部を閉鎖することが可能になり、タイムズ・スクエアにあるさまざまな大規模スクリーンのオーナーの皆様からも、《蝶々夫人》をそこで映していいという許可をいただきました。市長のおかげで、私たちはタイムズ・スクエアに座席を並べることが可能になり、そしてまた、寄附により、さまざまなサウンド・システムも運び込むことができました。もちろん何千人の方が、タイムズ・スクエアでこの《蝶々夫人》を楽しみ、またMET前の広場でも、4,000人の方たちが、そこに設置された大規模スクリーンで同じように楽しむことができました。これで、METが身近な存在であり、新しい時代に入ったことが、わかっていただけたと思います。

ここで、皆様には、昨シーズンのオープニングの《蝶々夫人》を取り上げたさまざまなニュース番組をごらんになっていただきたいと思います。どのような雰囲気だったか、これでおわかりになると思います。

(上映②『《蝶々夫人》とMETビューイング』P34参照)

【ゲルブ】 実際にこのイベントが大成功であったことを確信したのは、想像を絶する数の方たちが「私もあのときにはタイムズ・スクエアにいました」と、おっしゃってくださったからです。これがあまりにも大きな成功であったがために、これから毎年私たちはオープニング・ナイトをタイムズ・スクエアで上映することにしました。ですので皆様、タイムズ・スクエアに、どうぞ足をお運びください。

この《蝶々夫人》があったからこそ、そのシーズン全体の雰囲気がそこで定着したと思います。実際にこれが古いプロダクションであれば、チケットもそれほど売れなかったでしょう。このような新しいダイナミックなプロダクションであったからこそ、13回の公演がすべて完売になりました。METというのは、世界の中でも最も大きい劇場で、3,800の席があります。それを完売するのは、それほど易しいことではありません。けれども、このオープニングの勢いがあったからでしょうか、昨シーズンは、88回の公演が完売しました。その1年前のシーズンの完売は20公演だけだったのと比べるとかなりの成長だと思えます。

5月にシーズンが終わったばかりですが、チケットの売れ行きも7.1%増えていました。9月11日事件から6年間、ずっと減少していた売れ行きから、初めて私たちのチケット

収入が増えたのです。来年の定期会員数もやはり10%伸びました。今は、このご時世で、世界中のオペラハウス、オーケストラは聴衆の数が減少し、定期会員が減って、苦しい状況にある中でのことです。この聴衆の数が減っているというトレンドをUターンさせるためには、やはりオペラ、そしてまたオーケストラのトップの方たちは、ダイナミックで創造的な活動をみずから始めなければいけないと、私は信じます。

また、私たちはさまざまなアウトリーチ・プログラムをしています。それが可能であるのも、作曲家たちが意図した音楽と芸術の偉大な融合であり、それが高い水準で実現できるからこそ、新しい聴衆に説得力をもってオペラを見ていただけるのだと思うのです。

METのパトロンたち、そして、年配の方たちが恐れているものが1つあります。よくドイツで見られるような新しいコンセプトをもとにした前衛的なプロダクションは、METのパトロンたちに言わせると、「ユーロ・トラッシュ（ヨーロッパのごみ）」と揶揄されています。

私は個人的には演出家と仕事をするとき、自分からリクエストはしません。もちろん、仕事の質が高いことは最低条件ではありますが、1つだけ言うことがあります。オペラの中のストーリーに誠実であってほしいということです。非常に当たり前のことに聞こえるかもしれませんが。オペラというのはすばらしいストーリーがあり、成功する例というのは、必ずそのストーリーを盛り立てる演出なのです。特にすばらしいアイデアをもたない演出家が何をするかと言うと、話に少し手を加えて、信じられないような場所や時に変えたりします。そういうことは比較的簡単なことですが、やはり聴衆の皆様はそれでは納得されません。

私は実際に総裁になるまでの1年間、世界中を回って、将来METで演出をしてみないかと、多くの方に声をかけてきました。ミュンヘンに行ったときは、ズービン・メータ Zubin Mehtaさんにお会いしました。その晩、《リゴレット》の上演があるので、そのリハーサルに来ないかと私を誘ってくださいました。彼はすばらしい指揮者ですが、この《リゴレット》がなぜか映画『プラネット・オブ・ジ・エイプス（猿の惑星）』と同じような設定で演出をされていたことに、私と同様、かなり動揺されていました。不思議なことに、ジルダとリゴレット以外のすべての出演者は、なぜか皆さん猿の格好をしていたのです。リハーサルに3分入ったところで、すばらしいテノールのラモン・ヴァルガス Ramón Vargasが自分のスーツ、つまりその猿の格好を破り捨てて脱いでしまい、ステージからすたすたと歩いておりてしまいました。私はこのようなプロダクションをMETに持ってくるつもりは

ありません。

私が興味のある演出家というのは、すばらしいお話をしてくれる方です。これらのすばらしい演出家は、なぜかMETで今まで仕事をしたことはなかった人たちです。世界中の、イギリス、アメリカ、多くの国々の演出家たちです。パトリス・シェローPatrice Chéreauなども2009年の秋にはMETデビューしますし、リュック・ボンディLuc Bondy、リチャード・エアRichard Eyre等も次々とMETデビューを果たします。そして、エリック・ルパージュの新しい〈リング〉もMETで紹介されます。ルネ・パペRené Papeも出ます。ペーター・シュタインPeter Steinも《ボリス・ゴドゥノフ》の演出をします。また、来る9月には《ランメルモールのルチア》で、メリー・ジーマーマンMary Zimmermanが演出を担当します。

彼ら演出家の共通点は、ふだんはいろいろな演劇作品を演出し、時にオペラを演出するという方たちです。彼らはオペラ歌手だからといって演技ができないということは決して受け入れません。彼らが受けるプロジェクトとは、自分自身が感動できるストーリーのあるオペラ作品のみです。また、彼らが声楽家たちと仕事をするときは、完全に俳優として扱っています。実際、アンソニー・ミンゲラがMETの《蝶々夫人》のリハーサルを始めたとき、感激しました。なぜかというと、私はMETでは初めて見た光景なのですが、歌い始める前に自分の歌詞を朗読させたのです。偉大な声楽家は、すばらしい演技をすることが可能です。今の若い世代の声楽家も、実は演技にとっても興味があります。そして、彼らは、オペラが演技と音楽の融合であることもしっかりと理解しています。すばらしいきれいな歌を歌うだけではなくて、その中での演技というものの位置づけをしっかりと理解しているようです。

ですから、皆様にお約束いたします。METを、オペラだけではなくて、「演劇の」劇場だと思ってください。皆様がMETのステージで見るものは、すばらしい音楽でもありますが、すばらしいドラマでもあると認識していただければと思います。これは私たちの仕事を簡単にするわけではありません。ですけれども、声楽家がステージの真ん中に立ってただ歌う日々は、もう過去のことです。今シーズンの《ヘンゼルとグレーテル》を演出するイギリスの偉大な演出家のリチャード・ジョーンズRichard Jonesは、ステージに突っ立って歌う方のことを、「ステージに車を停めて吠えている」というふうに表示します。

すばらしい演出家たちを起用し、新しいプロダクションを上演する試みは、すばらしい声楽家たちもそれに参加したいという気持ちにさせます。偉大な声楽家になればなるほど、

新しいプロダクション、偉大な演出家に惹かれるからです。

私はMETの総裁になるにあたり、世界中をいろいろ回りましたが、METを代表して、世界中でいろいろなアーティストの方たちとお会いすることができました。もちろん、将来METに出演するお約束をいただくためです。非常にうれしいことに、今トップの音楽家、アンナ・ネトレブコAnna Netrebko、アンジェラ・ゲオルギューAngela Gheorghiu、ロランド・ビリヤソンRoland Villason、ルネ・フレミングRenée Flemingなどから、これから何年も、毎年1つのプロダクションではなく、2つのプロダクションで歌ってくださるというお約束をいただいております。

私たちMETも、2011年の6月にジャパン・アーツの招聘で来日公演を行います。今までお話ししたさまざまな試みを反映させるすばらしいキャストとともに来日いたします。日本では3つの演目を紹介します。アンナ・ネトレブコ、ロランド・ビリヤソン、マリウス・キーチェンMariusz Kwiecienが出て、ジェイムズ・レヴァイン指揮の《ラ・ボエーム》。《ドン・カルロ》では、バルバラ・フリットーリBarbara Frittoli、オリガ・ボロディナOlga Borodina、ドミトリー・ホロストフスキーDmitri Hvorostovsky、そしてルネ・パペが出ます。これもジェイムズ・レヴァイン指揮です。

ジェイムズ・レヴァインからは、昨年は来日公演に参加できなくて非常に残念であったというメッセージをいただいています。今、ジェイムズ・レヴァインはヨーロッパにいらっしゃいますが、けさ電話でお話ししたときに、きょうの講座のお話をしましたら、日本の皆様には大変申しわけなく、日本が大好きなので、またここで皆様にお会いできることをとても楽しみにしていることをぜひ伝えてほしいと、メッセージをお預かりしました。

もう1つの作品は、今シーズンのオープニング、9月に上演される《ランメルモールのルチア》で、ジャンアンドレア・ノセダGianandrea Nosedaの指揮です。今トップのコロラトゥーラ・ソプラノとして活躍しているディアナ・ダムラウDiana Damrauがその主役を歌います。彼女は昨シーズンの2つの演目、《セビリャの理髪師》、そして《エジプトのヘレナ》で大成功を収めています。そして、ピョートル・ベチャーラPiotr Beczalaというポーランド出身のテノールが彼女とともに歌うことになりました。彼は昨シーズン、《リゴレット》でMETのデビューを果たしたばかりのテノールです。彼はMETの聴衆の皆様から非常に大きく認められ、私が思うには、ここ数年の間で大スターになると思います。

来シーズン、METでは新しいプロダクションが7つ紹介されます。この数はMETが1966年にオープンして以来、最も多い新プロダクションの数になります。そこで披露

されるのが、《ランメルモールのルチア》《マクベス》《トーリードのイフィジェニー》《ヘンゼルとグレーテル》《ピーター・グライムズ》《サティアグラハ》そして《連隊の娘》です。これらは、レパートリーの選択だけでなく、そこに出ている歌手と演出家、両者のバランスが絶妙だと思います。やはり人々に劇場に足を運んでいただくのには、これらすべての要素のバランスがとれていることが不可欠だと思います。パヴァロッティが絶好調の時期は、1人のそういうスターがいればそのステージが成り立ちましたが、もうそういう時代は過去のことなのです。

今の紹介の中にもありましたが、《サティアグラハ》という作品があります。これは、アメリカの作曲家フィリップ・グラスPhilip Glassの初期の名作です。私たちは今後毎シーズン、新しい作品、すなわち現代作品で、既に書かれているもの、これから書かれていくものを必ず紹介していく試みをしたいと思います。オペラを今後も繁栄させていくためには、次々と新しいレパートリーを増やしていくことがとても重要です。METは、過去においては、現代作品に特に力を入れていなかったと思います。ですけれども、私はこれはとても重要なことだと思いますし、1年に紹介される演目が23から24ある中の1作品なので、割合としてはまだまだ少ないと思います。

先ほど私は、リンカーン・センター・シアターとともに始めた新しい委嘱作品のことに触れました。このプログラムは、さまざまなワークショップを通して、新しい作品がMETのステージで上演できるような環境に整備していくプログラムです。

今、現代作品が直面している大きな問題は、ある作品が委嘱されたときに、実際にそれが上演されるまでの間に、それに磨きをかける作業になかなか時間が取れないところではないでしょうか。例えば、ブロードウェイで紹介される新しいミュージカルは、実は地方でいろいろなリハーサルをしたり、軽い上演を試みたり、磨きをかけてからブロードウェイにデビューさせます。実際に初演される前にそのような試みがあることで、成功の確率を上げることが可能なのです。残念ながら、オペラの世界ではそういうことが今まで行われていませんでしたので、初演が成功で終わる作品はとても少ないのです。だからこそ、私たちはこのようなプログラムを立ち上げ、委嘱作品があったときには、それが成功するために、事前の環境整備をしたいと考えました。

これはMETがほかのオペラハウスとのコ・プロダクションを始めた理由の背景にあります。私たちは、新しい作品に対して、最初に初演をするオペラハウスでなければいけないなどという考えはありません。私たちはパートナーと一緒にそういう作品をつくって、

そのパートナーのオペラハウスでそれを先に上演して、そこでの失敗からいろいろなことを学んで、METで紹介をするときに、さらにいいものにして皆様に見ていただきたいと考えます。

日本でハイビジョンでごらんになった方もいらっしゃるかと思いますが、これから皆様にごらんいただくのは、《始皇帝》からの抜粋です。作曲は中国のタン・ドゥンTan Dunです。これは上演されるまで何年もかかった作品ですが、実は私はこのプロジェクトには何もかかわってはいません。ですが、私はタン・ドゥンと非常に親しい仲にあり、前にクラシックのレーベルを運営していたときに、彼とは芸術的にも非常に近い関係でお仕事をさせていただいていたいました。ですので、総裁になってからは、綿密にこの仕事を進めさせていただきました。これはチャン・イーモウZhang Yimouの演出であり、ブラシド・ドミンゴが主演を歌っています。

(上映③《始皇帝》P34参照)

【ゲルプ】 来シーズンは、ジョン・アダムズJohn Adamsの《ドクター・アトミック》を初演します。これ以外にも、ジョン・コリリアーノJohn Coriglianoの《ヴェルサイユの幽霊》、そして、オスヴァルト・ゴリホフOswaldo Golijovがやはりアンソニー・ミンゲラと共同作品で今作品をつくっている最中で、これも2011年に初演が行われる予定になっています。

そして、昨シーズンから始めた試みですが、若い聴衆は将来の聴衆になっていきますので、そういう方たちのための新しいプログラム、特に冬のホリデー・シーズンに向けたファミリー用のプログラムもつくり始めました。決して作品の品質を下げるのではなく、幅広い年齢層の方たちが楽しんでいただけるように、少し手を加えて、新しい作品の形で皆様に紹介しています。

例えば、昨年はずばらしい演出家のジュリー・テイモアとともに、《魔笛》を時間的にも短縮して、しかも英語のプロダクションを制作しました。この新しい英語の演出は、アメリカの詩人でもあるJ・D・マクラッチJ. D. McClatchyにより、100分以内の作品として、インターミッションなしで収めることができたのです。その短縮の中で、モーツァルトが残したさまざまな謎が明確にされるように手を加えました。実際に110分、私たちの希望より若干長くなってしまいましたが、非常に大きな成功に終わり、METのロビーを5歳の子たちが走り回っている光景は本当にうれしいものでした。そして、このプロダクションに関しては、リハーサルを公開して、ニューヨーク市のいろいろな学校の生徒さ

んたちを無料で招待する特別な企画にもなりました。

今ごらんいただくのは、ジュリー・テイモア演出の110分に短縮された英語版《魔笛》です。お楽しみください。

(上映④《魔笛》P34参照)

【ゲルブ】 このプロダクションで私たちが特に重要視していたのは、最も質の高い素晴らしい声楽家を起用することでした。皆様、お気づきだったかと思いますが、ルネ・パペがこの作品にも出演していました。この偉大な声楽家だけではなく、ジェイムズ・レヴァインが指揮をしておりました。これは子どもバージョンをつくっているのではなく、皆様に親しみやすい新しいバージョン、しかも芸術的にとても高いレベルのものを提供していることを知っていただきたかったのです。新しい聴衆にこの芸術を知っていただくためには、最も高いレベルのものでなければいけないと私は思っています。

来シーズンは、やはり英語バージョンで、12月に《ヘンゼルとグレーテル》を観ていただきます。これは家族向けのシリーズの延長だと考えてください。もし12月にニューヨークに行かれることがありましたら、ぜひこの《ヘンゼルとグレーテル》をごらんいただきたいと思います。非常におもしろい演出であると同時に、とても怖い《ヘンゼルとグレーテル》になっています。最近の子どもたちは、テレビや映画、コンピューターを通して、かなり洗練されてきていますので、ちょっと怖いぐらいだったら全く大丈夫なのではないかと思えます。

昨年、METの活性化という意味で最も取り上げられたのは、新しいメディアと技術を使った試みではないでしょうか。先ほど申しました組合の非常に柔軟な合意のおかげで、私たちはかつてない、広い意味でのオペラのディストリビューション、配給が可能になりました。もちろん、METは、メディアという意味で、もともと斬新な考えがあり、ラジオでの放送も76年前に始められています。日本でもその番組を耳にされた方もいらっしゃるかと思います。この合意のおかげで、放送もどんどん幅を持つことが可能になりました。今シーズンのオープニングから、デジタル・ラジオの24時間番組放送が可能になったのです。これは週に4本、生放送で聴ける番組です。METでは毎週7つのパフォーマンスがあり、そのうちの4本がラジオでライブで聴けます。これはシーズン中ずっと行われた番組です。組合との合意のおかげで、今まで76年間に蓄積してきた1,500の歴史的なプログラムをこのラジオ番組で放送することも可能になりました。さらに、シーズンを通して、1週間に1本、ライブでプログラムのストリーミングが可能になりました。会

場のオペラ・ファンの方たちでも、インターネットを通じてこれをお聴きになった方が、既にいらっしゃるかもしれません。ですが、やはり一番大きなインパクトを与えた私たちの新しいメディア戦略は、ハイビジョンにより、映画館でオペラを生で見ていただくことでした。この試みは、日本では松竹さんと共同でいろいろな劇場で上演をしましたので、既にお楽しみになった方もいらっしゃるかもしれません。

アメリカでこの企画が発表されたとき、多くの方たちから、METのコンテンツをハイビジョンで映画館で見せることに対して、いかななものかという意見をいただきました。それでも私は、オペラ・ファンの皆様というのは本当に熱心で情熱的であるので、この企画は絶対に受け入れられると思ったのです。私がこのヒントを得たのは、ほかのオペラ・カンパニーではなく、スポーツからだったのです。1つの例がニューヨーク・ヤンキースです。ヤンキースのファンというのは、アメリカ中にいて、その熱意はすさまじいものがあります。実際にニューヨーク・ヤンキースのゲームを映画館で上映はしませんが、これはいろいろなITを通して、テレビ、またハイビジョン、ラジオで、必ず全ゲームが何らかの形で放映されています。それでも、こうしたメディアが決してヤンキー・スタジアムに行く代わりになっているわけではないのです。実際に、さまざまなメディアでずっとヤンキースのゲームを見続けると、彼らはヤンキー・スタジアムに次は行きたいという気持ちに駆られるのです。オペラ・ファンの熱意は、スポーツ・ファンの熱意に劣らないと思っていますので、これもやはりオペラで生かせるのではないかと考えました。

私たちが提供したプロダクションは、実際にステージ上に最高15台までのカメラを導入して、皆様にさまざまなメディアを通してオペラを楽しんでいただくということでした。スポーツ同様、実際のゲームだけではなく、その裏で何が行われているか。幕がおり、インターミッションが始まったら、実際、その裏ではどのようなことが行われているのか、カメラをそちらのほうに持っていったのです。そのために、インターミッションの時間は、実際にどのように背景が動かされているのか、またスターたちがバック・ステージでインタビューを受けたりするところが収録されたのです。

私は、オペラハウスを運営しており、過去にはハイビジョンのプロダクションを担当するプロデューサーをしていましたので、ここに出ている歌手の皆様にインタビューに応じていただけるよう説得することが可能だったのです。ステージに出るほんの数分前でもインタビューを許可していただきました。また、いろいろなオペラ・スターがほかのオペラ・スターをインタビューすることもしました。例えば《清教徒》のプロダクションでは、ア

ンナ・ネトレプロコが狂乱の場面に出る直前に、ルネ・フレミングがバック・ステージにおいてインタビューするシーンもありました。オペラ・ファンとしては、1人のディーヴァが別のディーヴァをインタビューするという、こたえられないシーンではないでしょうか。

METの聴衆を増やすという意味では、最終的にこういう手法がすべて必要だと考えました。それからこのプロジェクトはひとり歩きを始めました。まず、だれも予想していなかったのですが、アメリカ、カナダ、ヨーロッパでこれが上映されたとき、そこに来ていた観客の皆様は、映画館にいるのではなくて、まるでオペラハウスにいるかのような行動を始めたのです。実際にアリアが終わると、歌手たちに聞こえるのではないかと思えるぐらい、皆様が拍手を始めるのです。これは1つの部屋の中でオペラのファンが、同じ経験をみんなでシェアし、1つのコミュニティをつくっている、その雰囲気大きな役割を果たしたのではないのでしょうか。最近では電子的なエンタテインメントは、使用者がどんどん孤立化してしまい、自分でiPodの世界に入ってしまったたり、インターネットも同様に、どんどんみんなが孤立するというトレンドがあるようですが、このMETの試みは、その正反対をいっていると思います。

今ごらんになっていただいた《魔笛》は30の映画館で紹介されました。それが最初の上映で、シーズンが終わるころには、プッチーニの〈3部作〉が何と350の映画館で上映されるようになっていたのです。

ジャーナリストの皆様は、これは文化的に新しいことだと、大きく取り上げてくださいました。LAタイムズでは、実際にこの新しい試みは、字幕というものができて以来の最も影響力ある進展ではないかと絶賛してくださいました。それほどこまで本当かわかりませんが、アメリカ中、世界中の皆様がオペラを楽しんでいることは間違いないと思います。

METのこのハイビジョンでの放映は、世界中の劇場で、32万5,000枚以上のチケットが販売されました。この数字というのは、実際、METの1シーズンのキャパシティの4割を占める数字になります。そして、来シーズンには、8つの演目が世界中の800以上の劇場でハイビジョンで上映されます。もちろん、これらはイギリス、ドイツ、オーストリア、スイス、デンマーク、ノルウェー、そして日本でもお楽しみいただけます。私たちは、世界中で100万人以上の方々にこれを楽しんでいただけるのではないかと予測しています。そうすると、METのキャパシティよりも多い方たちが映画館でMETを楽しんでいただけるようになるのです。

最後に皆様にごらんになっていただくのが、このハイビジョンの試みでシーズンの最後を締めくくったプッチーニ〈3部作〉の一部分です。ここで皆様に気がついていただきたいのは、最も重要なのは、幕がおおりて、その裏でどういうことが行われているのかで、そういうところをちょっと楽しんでいただきたいと思います。

(上映⑤『プッチーニ〈3部作〉の舞台裏』P34参照)

【ゲルプ】 これらの作品は、まず映画館で上映され、最終的にはテレビで放映されま
す。その間にはVOD (ペイ・パー・ビュー) のケーブルTVなどでごらんになってい
だきます。その後、最終的にはDVDやCDで楽しんでいただけます。

先ほど申しましたように、来るシーズンは、8演目、このような形で上演します。ハイ
ビジョンの放映に関しては、アンナ・ネトレブコとロランド・ビリャソン出演の《ロミオ
とジュリエット》で始まります。それから、《ヘンゼルとグレーテル》、新しい《マクベス》、
カリタ・マッティラKarita Mattila出演の《マノン・レスコー》、そして新しい《ピーター・
グライムズ》、ベン・ヘプナーBen Heppnerとデボラ・ヴォイトDeborah Voight出演の《ト
リスタンとイゾルデ》、アンジェラ・ゲオルギュー出演の《ラ・ボエーム》、ナタリー・デ
ッセイNatalie Dessayとファン・ディエゴ・フローレスJuan Diego Flores出演の《連隊の
娘》です。

これらの作品のもう1つの利用法としては、教育にあると思います。来るシーズンは、
ニューヨークの教育庁と一緒に、これら8演目をニューヨークの公立の学校の中で、先生
たちと子どもたちが無料で見られるようにします。私のビジョンとしては、その明くるシ
ーズンまでには、これを全国に広げて、何十万という学校で子どもたち、そして先生方が、
そのためにつくられた教育用のいろいろな冊子とともにこのオペラを楽しんでいただけ
るようになればと思うのです。

METの新しい試みが、世界中のさまざまなオペラハウスの新しい試みにもつながって
います。ここ数週間での進展ですが、イギリスのロイヤル・オペラ・ハウスも、このメデ
ィアをつかったさまざまな試みをしたいということでした。また、スカラ座Theatro alla
Scalaのオープニングも劇場で上映し、ウィーン国立歌劇場でも、やはり周りの広場でこれ
を見られるようにする。ワシントン・オペラのプラシド・ドミンゴも、幾つかの演目に関
しては、大学などで上映をするとのこと。この動きは、さまざまな団体にとって、お
客様との間を縮める試みが必要であり、その中でメディアが最も大きな役割を果たすとい
うことを理解されたのだと思っています。ですが、これらのメディアの試みも、METに

みずから足を運ぶ代わりにはなりません。ですので、ぜひ皆様、METまでお越しください。

私たちが今回のプロジェクトで成功した一因としては、実際、オペラハウスを運営している人間と、この放映をプロデュースしている人間が同じだということがあると思います。このプロジェクトには、私が今まで仕事で一緒してきたすばらしいスタッフたちをチームとして迎えることができ、いろいろな演出を考えるときでも、メディアのことを念頭に置きながら、さまざまなステージを制作しました。これらの放映に関して、ステージ上で行われていることの妥協は一切ありません。逆に、お互いに刺激をし合い、とてもいい効果が生まれています。

このプロジェクトはまだ始まったばかりです。そして、続けたいと私も願っていますし、実際に現場の一人として、それをお約束したいと思います。この私の目的を達成するために、芸術の面、またビジネスの面、両方をこれからも熱意を持って取り組んでいきたいと思っています。私たちのMETと一般の方々との距離を縮める試みは始まったばかりで、メジャーと言われる文化の流れにぜひ私たちもまた参加したいと思っています。

私とMETとの歴史は非常に長い関係にあります。1980年代はフリーランスではありましたが、メディアのプロデューサーをしていました。METとの関係はもっとさかのぼり、1970年代、私はまだ高校生でしたが、METの客席案内係のアルバイトをしていました。そのときには、そのうちMETの総裁になるぞという夢を見たのも覚えています。その夢がかなってしまいましたので、非常に重いものを何か肩に感じていますが、私は日々、喜びと興奮でいっぱいです。きょうはどうもありがとうございました。

第Ⅱ部

質疑応答

【ゲルブ】 専門家の皆様がそろいました。これから質疑応答でしょうか。

【石田】 そうです。ご紹介ありがとうございます。お時間も迫っていますので、ご紹介は私のほうからさせていただきます。

左手に、音楽評論家で、オーチャードホール・プロデューサーの黒田恭一さんです。

右手に、引き続きまして、広渡勲教授でございます。

私は、オペラ研究所の石田でございます。どうぞよろしく願いいたします。

きょうは、「メトロポリタン歌劇場の未来戦略」というタイトルをつけさせていただいております。皆様にはゲルブさんの未来戦略を存分に今お聞きいただいたところですが、少し戻った時代のお話をしてみたいと思っております。ロビーの展示を、皆様、お気づきになりましたでしょうか。1966年当時のMETこけら落とし公演の資料が出てまいりまして、昭和音楽大学の図書館に宮沢縦一さんという評論家の方が寄贈された資料です。まだごらんになっていない方は、どうぞごらんください。

その時代も含めて、METの少し古い時代をご存知の方が、きょうのお客様の中にも非常に多くいらっしゃいます。黒田さんから、その様子も含めて、少し昔の話をしていただければと思ひまして、そこから始めたいと思ひます。

【黒田】 ほとんど年寄り扱いですね。1966年に旧METから新しいMETに変わったんですね。そのときに、RCAがMETで歌った人たちをピックアップした全集をつくりまして、そこにおまけとして、旧METの緞帳を切ってこのぐらいの大きさにして、つけて出したことがあります。

METは、そういうことに大変積極的な劇場でして、実は大戦前も、METのあるニューヨークは東海岸で、西海岸との間に時差があるものですから、そのままストレートに中継できないということで、公演をすべてレコーディングして、西海岸のプライム・タイムにオンエアした。つまり音声だけの時代ですけれど、それをやっていたものですから、当時の録音がほとんど残っていないと思われていた、例えば、ジョヴァンニ・マルティネッリ Giovanni Martinelliとローレンス・ティベット Lawrence Tibbettが歌っている《オテロ》であるとか、キルステン・フラグスタート Kirsten Flagstadとラウリッツ・メルヒオール Lauritz Melchiorの《トリスタンとイゾルデ》など古い時代のものが西海岸で放送するために録音されていて、それが今CDになって出ていたりいたします。今度のMETが始めたMETビューイングという配信活動の原点がそこにあるのではないかと思います。METビューイングのことが発表になったときに、あの続きみたいなことが今度はビデオで行

われるのかというふうに僕は理解いたしました。

ただ、ゲルブさんは盛んにMETビューイングを映画館でとおっしゃっていたんですが、僕は去年の年末に歌舞伎座で、さきほどの《魔笛》を見たのですが、当日券を買って入ったものですから、すごい隅の席でした。歌舞伎座のステージというのは横長なので、とても横から見ることになりました。若干見にくいところはあったのですが、逆に、オペラが始まるまで、METの客席をずっと写している画面が映し出されまして、それと歌舞伎座にいらっしゃる方がだぶって、いわゆる臨場感というようなもので、とてもおもしろい体験をいたしました。歌舞伎座というのは、日本のああいう舞台芸能の象徴のようなところがありまして、そこにオペラが持ち込まれた。最新のMETで上演されたオペラが持ち込まれたことで、僕は大変興味深く見ました。

これがずっと続けて行われていくことを望みたい半分、あれだけMETのすごい舞台のものを常に常に見ていると、では藤原歌劇団がやる舞台はどうなんだみたいなことになって、このオペラはこうだと思っていたのが、それがお見合い写真で、実際に会ってみたら全然違うみたいなことになる弊害というのが、もしかするとああいうものには片方にあるのではないかと若干心配しておりますが、広渡さん、どうでしょうね、その辺は。

【広渡】 私はその《魔笛》は拝見していません。というのは、食わず嫌い——というわけではないのですが、何となくオペラを劇場で映像を通して観るということに抵抗を感じていて行きませんでした。ただし、今回、このお話をいただいて、銀座のブロッサム・ホールに伺って、ロバート・カーセン演出の《エフゲニー・オネーギン》を拝見しました。映画が始まって、最初の5分ぐらい、耳が慣れるまでは、音響的にちょっといろいろ気になり、映像に集中できなかったのですが、だんだん慣れてきますと、今度は劇場で観るオペラとは別の何か違うものとして、スクリーンの中で展開するドラマに大変感銘を受けました。オペラをこういう形で楽しむというのも否定できないし、舞台芸術のライブ感というのは生のステージにおいて得られるものだし、その選択については複雑ですね。プロダクションの内容次第ということも言えますね。

【黒田】 このことはレコードが普及し始めたころにも言われたことで、もう随分昔のことになりますが、ドイツのシュトゥットガルトの劇場の人とシュトゥットガルトで話したときに、レコードが普及したために、もうその土地その土地のスターというのがなくなってきていると。これはやっぱりすごく困ったことで、みんな《トリスタンとイゾルデ》を聴くときには、イゾルデはビルギット・ニルソンBirgit Nilssonでなければイゾルデじ

やないというようにイメージができてしまっていて、我々の町が持っていたイゾルデというのが、いかにも二軍みたいな感じをだんだん持たれるのが困るということを、そのシュトゥットガルトの劇場の方がおっしゃったことがありました。すごくいいものが広まることは、とても好ましいことですが、ひとつ裏側にはちょっと危険もあるかなと思っています。

【ゲルブ】 もちろん、このプロジェクトの意図がそういうところにあるわけでは決してございません。METはずっと来日公演をさせていただいていますが、世界中のスカラ座、ロイヤル・オペラといった劇場も来日します。これはやはり日本の聴衆の皆様が、すべてのすばらしい公演を経験したいという気持ちがあるからなのではないかと思います。

世界のどの国と比べても、日本に最も世界の偉大なオペラ・カンパニーが来日している現状があります。しかも定期的に来日しています。

このハイビジョン放送を、私はとても誇りに思っています。ですが、ライブのオペラを経験する代わりには絶対になりません。オルタナティブであり、決してその代理にはならないのです。もしこれが代わりになるのだと私が思いましたら、多分、METの会場にはだれも来なくなってしまうから。

【石田】 ということですが、結局、その町々にすばらしい劇場があって、その劇場が元気で、カンパニーがあればカンパニーも元気で、さらにメトロポリタンの今回のプロジェクトのような仕掛けがそれぞれの町で行われるという、いろいろなオペラの楽しみ方が1つ増えたと考えることではいかがでしょうか。

【黒田】 そうだと思います。やはりこのMETビューイングの場合にはとても臨場感が大事にされていて、いかにもそこにいるような感じというのを、確かに僕たちは客席にいて味わうことができるんですが、そうすると、バーチャルなもの本場の劇場のものとの区別というのはなかなか難しくなるようにも思いますが、いかがですか。

【広渡】 そうですね。それと、もう1つ、この後《外套》を見ていただきますが、それを見ると、オペラ歌手が、今までの状況でいいのかどうか。ここまでアップで映されて、もう髪の毛一本まで見えるわけですから、これから先、これは大変なことだなと。リアリティをここまで求められるということは、もう演技とか何とかいう問題ではなくて、オペラ歌手にとってもものすごくハードルが高くなるなということを考えました。

【黒田】 今話してくださっている広渡さんは、実は1988年にジャパン・アーツが初めてMETを呼んだときに、舞台の責任者を務めた方でして、そのときにMETの裏のほうまでよくごらんになっているので、METというのはどんなものかというのを、簡単

にお話しいただけますか。

【広渡】　そうですね。例えば、ウィーン国立歌劇場とか、ミラノ・スカラ座とも仕事をさせていただきましたので、そこの比較になりますが、例えば、オペラの引越公演においてバックステージ・サイドのほうでいえば、METは効率や与えられた条件を考慮して、あまり無理はしない。必ずスケジュールにおさまるような形で、与えられた条件の中でベストをつくすというような舞台作りをします。ところが、ミラノ・スカラ座の日本公演では、例えば、日本の劇場にとうてい入らない数のコンテナをとにかく持ち込んでおいて、そのうちの何本かは、もう劇場に入らないので、コンテナの扉を開けることなくそのままイタリアに持ち帰るとか。舞台にかける姿勢とか、こだわりに違いはありますね。

【黒田】　かなりぼやかしてあるところもあるお話だったけど、何となくニュアンスはよくわかります。

【ゲルブ】　ちょっとよろしいでしょうか。今おっしゃったことに対して、2つコメントさせてください。

METのハイビジョンの放送で小さい劇場たちが実際圧迫されているのではないかという意見もあったようですが、実はアメリカでは、この小劇場たちがMETのライブ・ビューイングと協力関係にあると言っても過言ではないと思います。実際に、映画館の方たちと共同でこのハイビジョンの放送を盛り立てて、自分たちの地域での上演に何らかの形でつなげるように、一般の方たちにオペラに興味を持っていただけるようにと、一緒になって盛り上がっています。

クローズ・アップなど、いろいろなことで、歌手の演技等もいろいろ大変になってくるのではないかというコメントもありましたが、実際に、これはその方の外見だけではなく、メイクアップ、また衣裳のことも非常に大きな要因を果たしていると思います。優秀な声楽家たちは、生まれ持った劇的な演技ができると思いますし、そういう要素がなければ偉大な声楽家にはなれないと思っています。ですから、実際、テレビのアップ・シーンなども、彼らはそれほど問題視はしていないようです。常に微妙な演技というものがテレビや大きな画面だけではなく、ステージ上でも非常に大きな役割を果たしているのがわかっていただけだと思います。実際に演技のできない声楽家たちほど、典型的と言われているオペラ歌手のただ棒のような演技、大きな動きをしてしまいます。そうしないと、やはりみんなとコミュニケーションができないと彼らは考えているのだと思います。そういう演技は、もちろんこの大きなスクリーンでも成功しませんし、ステージ上でもやはり受け入れ

られないのです。ですが、やはりメイクの重大さというのは、本当に幾ら語っても足りないぐらいです。

【石田】 皆様からの質問を差し上げる時間があまりなくなっていました。

ME Tの今後の日本における戦略、あるいは、アジアのオーディエンスに対するこれからの計画が、ヨーロッパと違いがあるのかどうか、教えてくださいということです。

【ゲルブ】 私が思うには、日本の聴衆の皆様は、世界の中でも最も豊富な知識を持ち、そしてまた、情熱も持っていらっしゃいます。私たちは、このようないい歌、いい音楽、いいパフォーマンスに対して非常に喜んでくださる皆様のいる日本だからこそ、定期的に来てみたいという思いがあり、こういう芸術、その高いレベルを理解していただける方たちの前で上演することは、とてもうれしいことです。

もちろん、ヨーロッパにも知識の豊富な音楽ファンたちは大勢いらっしゃいますし、私たちがヨーロッパに行きたいと思います。ですけれども、私たちのようなグランド・オペラは、アメリカでは国からの援助をいただいております。ですからこそ、海外に出るといことは、非常に経済的に厳しいものがあり、経済的な条件がそろわないとなかなか難しいのです。

【石田】 最後になります。日本の観客について今お話を伺いましたが、指揮者、演出家、日本人のアーティストも今どんどん世界に出ていっております。ME Tでも、実際に今度小澤征爾さんが振られるそうですが、来年のラインナップに大野和士さんの名前も見えたようです。日本人のアーティストについてのゲルブさんのお考えを伺えれば。

【ゲルブ】 とにかく日本にはすばらしいアーティストが大勢いらっしゃると思っています。最終的にはME Tでは世界の中でもトップの方たちにぜひ来ていただきたいと考えていますので、国を問わず、できれば多くの国の方々に来ていただきたいと思っています。もちろん、日本という国は、音楽に対して非常に情熱的な国でもあります。その中では、クラシック音楽は特に重要な位置づけにあり、すばらしいアーティストたちを輩出されています。私はME Tにも偉大な指揮者たちを大勢招聘したいと思っています。もちろん、ジェイムズ・レヴァインもすばらしい指揮者ですが、彼が指揮できるコンサートの数は、限界があります。これからのME Tでは、大野さん、そして小澤さんを招待したいと思いますけれども、とにかくいいアーティストにどんどんME Tのステージに上がっていただきたいと考えます。

【石田】 ありがとうございます。

さて、皆様、ゲルブさんの講演はここで終わりにさせていただきますが、17時から、プッチーニの〈3部作〉の《外套》のライブ・ビューをこの劇場でこのままお楽しみいただくことができます。ぜひ引き続きご鑑賞いただければと思います。

きょうはピーター・ゲルブさんをお迎えして、約3時間にわたりまして講演会を開催してまいりました。ご登壇いただいた方、そしてご来場の皆様、長い間ありがとうございました。

当日配布資料

■公開講座での上映映像一覧■

①『ピーター・ゲルブ・プロダクション』 A Peter Gelb Production

～ピーター・ゲルブがこれまでにプロデュースした作品ダイジェスト

- ・《エディプス王 Oedipus Rex》 サイトウ・キネン・フェスティバル
- ・《ザルツブルクのカラヤン Karajan in Salzburg》 出演：ヘルベルト・フォン・カラヤン
- ・《マスターピース・シアター Masterpiece Theater》 出演：ウィントン・マルサリス
- ・《シンプリー・バロック Simply Baroque》 出演：ヨーヨー・マほか
- ・《シング・スピリチュアルズ Sing Spirituals at Carnegie Hall》

出演：ジェシー・ノーマン、キャスリーン・バトル、ジェイムズ・レヴァインほか

- ・《モスクワのホロビッツ Horowitz in Moscow》 出演：ウラディーミル・ホロヴィッツ

②《蝶々夫人》とMET ビューイング

～リンカーン・センター、タイムズ・スクエアでのビューイングの様子(2006年9月25日)

演出：アンソニー・ミンゲラ

出演：クリスティーナ・ガッラルド=ドマス、マルチェロ・ジョルダーニほか

③《始皇帝》～世界初演

作曲・指揮：タン・ドゥン、演出：チャン・イーモウ

出演：プラシド・ドミンゴほか

④《魔笛》

演出：ジュリー・テイモア、指揮：ジェイムズ・レヴァイン

出演：ネイサン・ガン、ルネ・パペほか

⑤『ブッチーニ〈3部作〉の舞台裏～《外套》《修道女アンジェリカ》《ジャンニ・スキッキ》』

演出：ジャック・オブライエン、指揮：ジェイムズ・レヴァイン

出演：マリア・グレギーナほか

メトロポリタン歌劇場について

【基本事項】

■組織

- ・組織名称：メトロポリタン・オペラ・アソシエーション
The Metropolitan Opera Association
非営利法人、1933年に非営利組織として設立（歌劇場の開場は1883年）。
- ・所在地：30 Lincoln Center, New York, NY 100023, U.S.A.
- ・URL：<http://www.metopera.org>

■運営体制

- ・総裁：ピーター・ゲルブ Peter Gelb（第16代目）
- ・音楽監督：ジェイムズ・レヴァイン James Levine
- ・理事など：Christine F. Hunter:Chairman of the Board、William C. Morris: President & CEO、Mercedes T. Bass:Vice Chairman、Bruce Crawford:Chairman of the Executive Committee などの役職者10人、
経営理事38人、名誉理事7人、顧問理事53人、メンバー42人など

■劇場データ

- ・開場：ブロードウェイ39丁目に1883年10月開場。グノー《ファウスト》を上演。現在のリンカーン・センターには1966年に移る。同年9月16日にバーバーに委嘱した《アントニーとクレオパトラ》の世界初演でこけら落とし。
- ・客席数：約3,800席、このほか195名分の立見席あり。

【シーズン・データ】—2004/2005 アニュアル・レポートより作成

■公演数

- ・公演数318公演（オペラ公演：27演目226公演／その他の公演：92公演（パーク・コンサートなど）

■財政

- ・収入約20億9,600万ドル（約253億6,160万円）
（内訳概要）ボックス・オフィス、ツアー収入39.6%、寄付38.2%、公的助成9.4%、メディア収入2.7%など

【関連組織】

- ・メトロポリタン・オペラ・ギルド The Metropolitan Opera Guild Inc.（1936年設立）
——月刊誌'Opera News'などの発行、教育プログラムの実施、劇場関連商品の販売など
- ・ナショナル・カウンスル The National Council（1952年設立）
——オーディション実施など

メトロポリタン歌劇場 〈新たな観客創出の挑戦〉

(2007/2008 シーズン・プログラムより抄訳、およびオペラ研究所編、1ドル=121円で換算)

【メディア関連】

■ メトロポリタン・オペラ:ライブ・イン・HD (High Definition)

「映像と生の上演を融合させる MET の実験は、新しい芸術の形を生み出した」

— 『ロサンゼルス・タイムズ』紙

MET の高解像度生中継は、アメリカ、カナダ、ヨーロッパ、そして1日遅れで日本に、計約200の映画館に配信された。《魔笛》《清教徒》《始皇帝》《エフゲニー・オネーギン》《セビリヤの理髪師》(3部作)の6作品のシリーズは、生中継と再上演を合わせて50万人以上の観客を動員し、興行的にも大成功を収めた。さらにこのプログラムは『METの偉大なる公演 (Great Performances at the MET)』と題され、国内外でテレビ放送。2年目の2007/2008年も、世界中の映画館への高解像度生中継のほか、バック・ステージの生インタビューや、舞台裏の映像なども発信していく。

■ 土曜マチネ・ラジオ生中継

76年の歴史を持つラジオの生中継番組は、トール・ブラザーズ=メトロポリタン・オペラ国際ラジオ・ネットワークが放送している。有名人ゲスト、バック・ステージのアーティストへの生インタビュー、クイズ・コーナーなど、休憩時間にも魅力的なプログラムが組まれている。

■ 24時間衛星ラジオによるオペラ・チャンネル

シリウス・サテライト・ラジオのチャンネル85、メトロポリタン・オペラ・ラジオは、世界で初めての24時間衛星ラジオのオペラ・チャンネルで、シーズン中は毎週4公演の生中継と、METの膨大な資料室から、歴史的な名演の数々を放送中。www.sirius.com/metopera/

■ ウェブサイトの充実(METOPERA.ORG)

インターネット上でのオペラハウスの入口となるMETのウェブサイトは、新しいデザインと内容でリニューアルした。リアル・ネットワークス社との協力により、毎週ライブ映像が配信される。Real's Rhapsody オンライン・サービスにより、過去の上演も閲覧可能になっている。

【チケット割引】

■ 格安チケットの販売(Agnes Varis and Karl Leichtman Rush Tickets)

歌劇場理事である夫妻の寄付により、通常100ドル(12,100円)のオーケストラ席が、ガラと新制作のオープニング・ナイトを除く月曜日から木曜日まで、20ドル(2,420円)で入手

可能。開演2時間前より先着順、ボックス・オフィスで1人2枚まで（高齢者優待あり）。

■ 学生割引

29歳以下のフルタイムの学生に、平日の公演 25 ドル（3,025 円）、金曜日・日曜日の公演 35 ドル（4,235 円）の割引チケットを発売する。公演日の朝 10 時からボックス・オフィスで購入できる。

【MET のサポート・システム】

■ ギルド・メンバー Guild Members

年間 65 ドル（7,865 円）から参加可能。全員に月刊誌 Opera News の年間購読、MET グッズの割引、講演チケット、バックステージ・ツアー等の特典があるほか、額に応じて以下の特典が用意される。

- ・ **サポーティング・メンバー Supporting Members（125ドル/15,125 円）**
一般発売よりも早くシングル・チケットの購入が可能
- ・ **寄付メンバー Contributing Members（200ドル/24,200 円）**
「ベルモント・ルーム」に入室可能
- ・ **スポンサー・メンバー Sponsor Members（600ドル/72,600 円）**
ドレス・リハーサルへの招待
- ・ **後援メンバー Benefactor Members（1,500ドル/181,500 円）**
最上のギルド・チケットの優先権を持つ

■ パトロン Patrons

年間 2,000 ドル（242,000 円）から参加可能。ギルド・メンバーのサービスに加え、専従スタッフによる電話チケット・サービス、ランクに応じたチケットの優先利用、パトロン・ラウンジの利用、各公演でのクロークの優待利用などが可能。さらに、額に応じて以下の特典が用意される。

- ・ **スポンサー・パトロン Sponsor Patrons（4,000ドル/484,000 円）** リハーサルへの招待
- ・ **後援パトロン Benefactor Patrons（7,000ドル/847,000 円）**
リンドマン・ヤング・アーティスト・コンサートとレセプションへの招待
- ・ **プレミア・サークル・スポンサー・パトロン Premier Circle Sponsor Patrons（10,000ドル/1,210,000 円）**～マスター・クラスやMETのアーティストが参加する催しへの招待

■ ヤング・アソシエーツ Young Associates

20～39歳のオペラ愛好家を対象に、特別イベントへの招待などが提供される。さらに500ドル（60,500円）以上を支払うと、ギルド・メンバーのサービスが受けられる。

※ 既に会員の場合、さらに寄付することで追加サービスやチケットの優先が受けられる。

メトロポリタン歌劇場 2007-08 シーズン プログラム

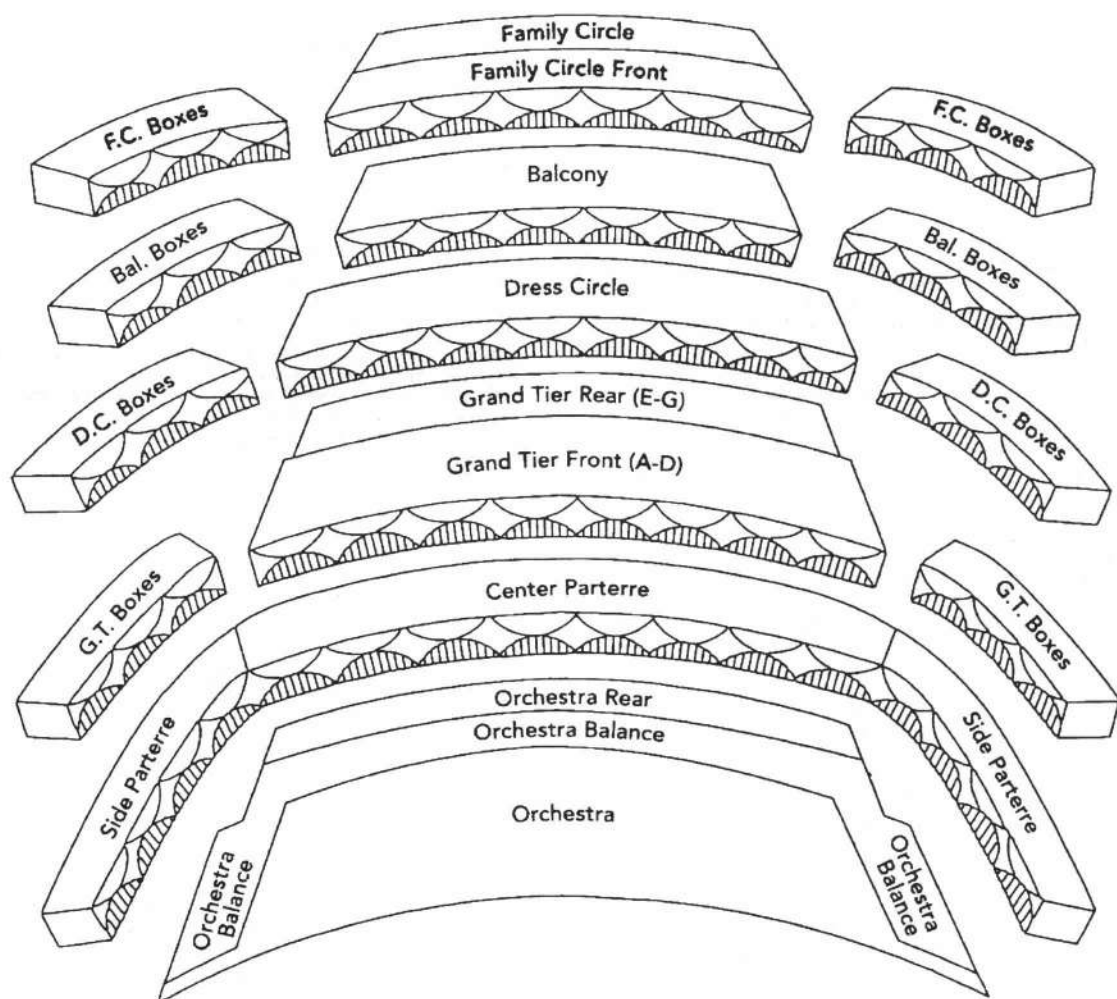
THE METROPOLITAN OPERA 2007-08 SEASON

*Monday	Sept 24	LUCIA DI LAMMERMOOR 6:30 <i>Opening Night New Production Premiere</i>			
Tuesday	Sept 25	ROMÉO ET JULIETTE <i>First Performance</i>	Monday	Nov 26	NORMA 7:30
Wednesday	Sept 26	No performance	Tuesday	Nov 27	IPHIGÉNIE EN TAURIDE 8:30 <i>New Production Premiere</i>
Thursday	Sept 27	LUCIA DI LAMMERMOOR	Wednesday	Nov 28	LE NOZZE DI FIGARO
Friday	Sept 28	No performance	Thursday	Nov 29	No performance
Sat Mat	Sept 29	AIDA <i>First Performance</i>	Friday	Nov 30	NORMA
Sat Eve	Sept 29	ROMÉO ET JULIETTE	Sat Mat	Dec 1	IPHIGÉNIE EN TAURIDE
			Sat Eve	Dec 1	LE NOZZE DI FIGARO <i>Last Performance</i>
Monday	Oct 1	LUCIA DI LAMMERMOOR	Monday	Dec 3	No performance
Tuesday	Oct 2	LE NOZZE DI FIGARO <i>First Performance</i>	Tuesday	Dec 4	NORMA
Wednesday	Oct 3	ROMÉO ET JULIETTE 7:30	Wednesday	Dec 5	IPHIGÉNIE EN TAURIDE
Thursday	Oct 4	AIDA	Thursday	Dec 6	No performance
Friday	Oct 5	LUCIA DI LAMMERMOOR	Friday	Dec 7	NORMA <i>Last Performance</i>
Sat Mat	Oct 6	LE NOZZE DI FIGARO	Sat Mat	Dec 8	IPHIGÉNIE EN TAURIDE
Sat Eve	Oct 6	ROMÉO ET JULIETTE	Sat Eve	Dec 8	ROMÉO ET JULIETTE
Monday	Oct 8	MADAMA BUTTERFLY <i>First Performance</i>	Monday	Dec 10	WAR AND PEACE 7:30 <i>First Performance</i>
Tuesday	Oct 9	LUCIA DI LAMMERMOOR	Tuesday	Dec 11	IPHIGÉNIE EN TAURIDE
Wednesday	Oct 10	LE NOZZE DI FIGARO	Wednesday	Dec 12	ROMÉO ET JULIETTE
Thursday	Oct 11	ROMÉO ET JULIETTE	Thursday	Dec 13	WAR AND PEACE 7:30
Friday	Oct 12	MADAMA BUTTERFLY	Friday	Dec 14	IPHIGÉNIE EN TAURIDE
Sat Mat	Oct 13	LE NOZZE DI FIGARO	Sat Mat	Dec 15	ROMÉO ET JULIETTE 1:00
Sat Eve	Oct 13	LUCIA DI LAMMERMOOR	Sat Eve	Dec 15	WAR AND PEACE 7:30
Monday	Oct 15	MADAMA BUTTERFLY	Monday	Dec 17	UN BALLO IN MASCHERA <i>First Performance</i>
Tuesday	Oct 16	AIDA	Tuesday	Dec 18	WAR AND PEACE 7:30
Wednesday	Oct 17	LUCIA DI LAMMERMOOR	Wednesday	Dec 19	IPHIGÉNIE EN TAURIDE
Thursday	Oct 18	LE NOZZE DI FIGARO	Thursday	Dec 20	ROMÉO ET JULIETTE
Friday	Oct 19	MADAMA BUTTERFLY	Friday	Dec 21	UN BALLO IN MASCHERA
Sat Mat	Oct 20	AIDA	Sat Mat	Dec 22	WAR AND PEACE 12:30
Sat Eve	Oct 20	LUCIA DI LAMMERMOOR	Sat Eve	Dec 22	IPHIGÉNIE EN TAURIDE <i>Last Performance</i>
Monday	Oct 22	MACBETH <i>New Production Premiere</i>	Mon Mat	Dec 24	HANSEL AND GRETEL 1:00 <i>New Production Premiere</i>
Tuesday	Oct 23	MADAMA BUTTERFLY	Mon Eve	Dec 24	UN BALLO IN MASCHERA
Wednesday	Oct 24	AIDA	Tuesday	Dec 25	No performance
Thursday	Oct 25	LUCIA DI LAMMERMOOR	Wednesday	Dec 26	WAR AND PEACE 7:30
Friday	Oct 26	MACBETH	Thursday	Dec 27	ROMÉO ET JULIETTE 7:30
Sat Mat	Oct 27	MADAMA BUTTERFLY <i>Last Performance</i>	Friday	Dec 28	WAR AND PEACE 7:30
Sat Eve	Oct 27	AIDA	Sat Mat	Dec 29	HANSEL AND GRETEL
Monday	Oct 29	DIE ZAUBERFLÖTE <i>First Performance</i>	Sat Eve	Dec 29	UN BALLO IN MASCHERA
Tuesday	Oct 30	AIDA	*Monday	Dec 31	ROMÉO ET JULIETTE 7:00 <i>Last Performance</i>
Wednesday	Oct 31	MACBETH	Tues Mat	Jan 1	HANSEL AND GRETEL 1:00
Thursday	Nov 1	DIE ZAUBERFLÖTE	Tues Eve	Jan 1	UN BALLO IN MASCHERA
Friday	Nov 2	AIDA 7:30	Wednesday	Jan 2	No performance
Sat Mat	Nov 3	LA TRAVIATA <i>First Performance</i>	Thursday	Jan 3	WAR AND PEACE 7:30 <i>Last Performance</i>
Sat Eve	Nov 3	MACBETH	Fri Mat	Jan 4	HANSEL AND GRETEL 1:00
Monday	Nov 5	AIDA 7:30	Fri Eve	Jan 4	No performance
Tuesday	Nov 6	DIE ZAUBERFLÖTE	Sat Mat	Jan 5	UN BALLO IN MASCHERA
Wednesday	Nov 7	LA TRAVIATA	Sat Eve	Jan 5	MACBETH
Thursday	Nov 8	AIDA <i>Last Performance</i>	Monday	Jan 7	DIE WALKÜRE 6:30 <i>First Performance</i>
Friday	Nov 9	DIE ZAUBERFLÖTE	Tuesday	Jan 8	HANSEL AND GRETEL
Sat Mat	Nov 10	LE NOZZE DI FIGARO	Wednesday	Jan 9	MACBETH
Sat Eve	Nov 10	LA TRAVIATA	Thursday	Jan 10	No performance
Monday	Nov 12	NORMA <i>First Performance</i>	Friday	Jan 11	HANSEL AND GRETEL 7:30
Tuesday	Nov 13	DIE ZAUBERFLÖTE	Sat Mat	Jan 12	MACBETH
Wednesday	Nov 14	LE NOZZE DI FIGARO	Sat Eve	Jan 12	IL BARBIERE DI SIVIGLIA <i>First Performance</i>
Thursday	Nov 15	LA TRAVIATA	Monday	Jan 14	DIE WALKÜRE 6:30
Friday	Nov 16	NORMA	Tuesday	Jan 15	MACBETH
Sat Mat	Nov 17	LE NOZZE DI FIGARO 1:00		Jan 16-21	No performances
Sat Eve	Nov 17	DIE ZAUBERFLÖTE	Tuesday	Jan 22	IL BARBIERE DI SIVIGLIA
Monday	Nov 19	NORMA	Wednesday	Jan 23	HANSEL AND GRETEL
Tuesday	Nov 20	DIE ZAUBERFLÖTE	Thursday	Jan 24	No performance
Wednesday	Nov 21	LE NOZZE DI FIGARO	Friday	Jan 25	No performance
Thursday	Nov 22	No performance	Sat Mat	Jan 26	IL BARBIERE DI SIVIGLIA
Friday	Nov 23	NORMA	Sat Eve	Jan 26	HANSEL AND GRETEL
Sat Mat	Nov 24	DIE ZAUBERFLÖTE <i>Last Performance</i>			
Sat Eve	Nov 24	LE NOZZE DI FIGARO			

Monday	Jan 28	DIE WALKÜRE 6:30	Monday	Mar 24	PETER GRIMES <i>Last Performance</i>
Tuesday	Jan 29	MANON LESCAUT <i>First Performance</i>	Tuesday	Mar 25	TRISTAN UND ISOLDE 7:00
Wednesday	Jan 30	IL BARBIERE DI SIVIGLIA	Wednesday	Mar 26	ERNANI 7:30
Thursday	Jan 31	HANSEL AND GRETEL <i>Last Performance</i>	Thursday	Mar 27	THE GAMBLER <i>First Performance</i>
Friday	Feb 1	MANON LESCAUT	Friday	Mar 28	TRISTAN UND ISOLDE 7:00 <i>Last Performance</i>
Sat Mat	Feb 2	DIE WALKÜRE 12:30	Sat Mat	Mar 29	ERNANI
Sat Eve	Feb 2	IL BARBIERE DI SIVIGLIA	Sat Eve	Mar 29	LA BOHÈME <i>First Performance</i>
Monday	Feb 4	LES CONTES D'HOFFMANN <i>First Performance</i>	Monday	Mar 31	THE GAMBLER
Tuesday	Feb 5	MANON LESCAUT 7:30	Tuesday	Apr 1	LA BOHÈME 7:30
Wednesday	Feb 6	DIE WALKÜRE 6:30	Wednesday	Apr 2	ERNANI 7:30
Thursday	Feb 7	IL BARBIERE DI SIVIGLIA	Thursday	Apr 3	No performance
Friday	Feb 8	LES CONTES D'HOFFMANN	Friday	Apr 4	THE GAMBLER
Sat Mat	Feb 9	DIE WALKÜRE 12:30 <i>Last Performance</i>	Sat Mat	Apr 5	LA BOHÈME
Sat Eve	Feb 9	MANON LESCAUT	Sat Eve	Apr 5	ERNANI
Monday	Feb 11	OTELLO <i>First Performance</i>	Monday	Apr 7	No performance
Tuesday	Feb 12	MANON LESCAUT 7:30	Tuesday	Apr 8	THE GAMBLER
Wednesday	Feb 13	LES CONTES D'HOFFMANN	Wednesday	Apr 9	LA BOHÈME 7:30
Thursday	Feb 14	IL BARBIERE DI SIVIGLIA	Thursday	Apr 10	ERNANI 7:30 <i>Last Performance</i>
Friday	Feb 15	OTELLO	Friday	Apr 11	SATYAGRAHA <i>Metropolitan Opera Premiere</i>
Sat Mat	Feb 16	MANON LESCAUT 1:00	Sat Mat	Apr 12	THE GAMBLER <i>Last Performance</i>
Sat Eve	Feb 16	LES CONTES D'HOFFMANN	Sat Eve	Apr 12	LA BOHÈME
Monday	Feb 18	OTELLO	Monday	Apr 14	SATYAGRAHA
Tuesday	Feb 19	LES CONTES D'HOFFMANN	Tuesday	Apr 15	LA BOHÈME 7:30
Wednesday	Feb 20	MANON LESCAUT	Wednesday	Apr 16	UN BALLO IN MASCHERA
Thursday	Feb 21	IL BARBIERE DI SIVIGLIA	Thursday	Apr 17	No performance
Friday	Feb 22	OTELLO	Friday	Apr 18	LA BOHÈME 7:30 <i>Last Performance</i>
Sat Mat	Feb 23	LES CONTES D'HOFFMANN	Sat Mat	Apr 19	SATYAGRAHA
Sat Eve	Feb 23	MANON LESCAUT 8:30 <i>Last Performance</i>	Sat Eve	Apr 19	UN BALLO IN MASCHERA
Monday	Feb 25	IL BARBIERE DI SIVIGLIA	Monday	Apr 21	LA FILLE DU RÉGIMENT <i>New Production Premiere</i>
Tuesday	Feb 26	OTELLO	Tuesday	Apr 22	SATYAGRAHA
Wednesday	Feb 27	LES CONTES D'HOFFMANN	Wednesday	Apr 23	UN BALLO IN MASCHERA 7:30 <i>Last Performance</i>
Thursday	Feb 28	PETER GRIMES 7:30 <i>New Production Premiere</i>	Thursday	Apr 24	No performance
Friday	Feb 29	IL BARBIERE DI SIVIGLIA <i>Last Performance</i>	Friday	Apr 25	SATYAGRAHA
Sat Mat	Mar 1	OTELLO 1:00	Sat Mat	Apr 26	LA FILLE DU RÉGIMENT
Sat Eve	Mar 1	LES CONTES D'HOFFMANN <i>Last Performance</i>	Sat Eve	Apr 26	DIE ENTFÜHRUNG AUS DEM SERAIL <i>First Performance</i>
Monday	Mar 3	PETER GRIMES	Monday	Apr 28	SATYAGRAHA
Tuesday	Mar 4	OTELLO	Tuesday	Apr 29	LA FILLE DU RÉGIMENT 7:30
Wednesday	Mar 5	LUCIA DI LAMMERMOOR	Wednesday	Apr 30	DIE ENTFÜHRUNG AUS DEM SERAIL
Thursday	Mar 6	LA TRAVIATA	Thursday	May 1	SATYAGRAHA <i>Last Performance</i>
Friday	Mar 7	PETER GRIMES	Friday	May 2	LA FILLE DU RÉGIMENT 7:30
Sat Mat	Mar 8	LUCIA DI LAMMERMOOR	Sat Mat	May 3	DIE ENTFÜHRUNG AUS DEM SERAIL
Sat Eve	Mar 8	OTELLO 8:30 <i>Last Performance</i>	Sat Eve	May 3	LA CLEMENZA DI TITO <i>First Performance</i>
Monday	Mar 10	TRISTAN UND ISOLDE 7:00 <i>First Performance</i>	Monday	May 5	LA FILLE DU RÉGIMENT 7:30
Tuesday	Mar 11	PETER GRIMES	Tuesday	May 6	LA CLEMENZA DI TITO
Wednesday	Mar 12	LA TRAVIATA	Wednesday	May 7	DIE ENTFÜHRUNG AUS DEM SERAIL <i>Last Performance</i>
Thursday	Mar 13	LUCIA DI LAMMERMOOR <i>Last Performance</i>	Thursday	May 8	LA FILLE DU RÉGIMENT
Friday	Mar 14	TRISTAN UND ISOLDE 7:00	Friday	May 9	MACBETH
Sat Mat	Mar 15	PETER GRIMES	Sat Mat	May 10	LA CLEMENZA DI TITO 1:00
Sat Eve	Mar 15	LA TRAVIATA	Sat Eve	May 10	THE FIRST EMPEROR <i>First Performance</i>
Monday	Mar 17	ERNANI <i>First Performance</i>	Monday	May 12	LA FILLE DU RÉGIMENT
Tuesday	Mar 18	TRISTAN UND ISOLDE 7:00	Tuesday	May 13	MACBETH
Wednesday	Mar 19	LA TRAVIATA 7:30	Wednesday	May 14	THE FIRST EMPEROR
Thursday	Mar 20	PETER GRIMES	Thursday	May 15	LA CLEMENZA DI TITO <i>Last Performance</i>
Friday	Mar 21	ERNANI	Friday	May 16	LA FILLE DU RÉGIMENT 7:30 <i>Last Performance</i>
Sat Mat	Mar 22	TRISTAN UND ISOLDE 12:30	Sat Mat	May 17	THE FIRST EMPEROR <i>Last Performance</i>
Sat Eve	Mar 22	LA TRAVIATA 8:30 <i>Last Performance</i>	Sat Eve	May 17	MACBETH <i>Last Performance</i>

※特に記載ない限り、夜公演は 8:00 開演、昼公演は 1:30 開演。

メロポリタン歌劇場 座席表と入場料



定期公演 シリーズ	シリーズ名					
	木曜 3、4、5	月曜 2、4 水曜 2 木曜 2 金曜 2、4、5	月曜 3、5 火曜 2、3、5 水曜 3、4、5 金曜 3	火曜 4	土曜昼 2、3、4 土曜夜 2、3、4	土曜昼 5 土曜夜 5
公演数	6 公演	7 公演	8 公演	9 公演	8 公演	9 公演
Orchestra Premium	¥181,500	¥211,750	¥242,000	¥272,250	¥266,200	¥299,475
Orchestra Prime	¥123,420	¥143,990	¥164,560	¥185,130	¥208,120	¥234,135
Orchestra Balance	¥68,970	¥80,465	¥91,960	¥103,455	¥140,360	¥157,905
Orchestra Rear	¥50,820	¥59,290	¥67,760	¥76,230	¥111,320	¥125,235
Center Parterre Premium	¥261,360	¥304,920	¥348,480	¥392,040	¥348,480	¥392,040
Center Parterre Boxes	¥217,800	¥254,100	¥290,400	¥326,700	¥290,400	¥326,700
Side Parterre Boxes*	¥76,230	¥88,935	¥101,640	¥114,345	¥140,360	¥157,905
Grand Tier Premium	¥181,500	¥211,750	¥242,000	¥272,250	¥266,200	¥299,475
Grand Tier Front	¥123,420	¥143,990	¥164,560	¥185,130	¥208,120	¥234,135
Grand Tier Rear	¥68,970	¥80,465	¥91,960	¥103,455	¥140,360	¥157,905
Grand Tier Boxes*	¥54,450	¥63,525	¥72,600	¥81,675	¥111,320	¥125,235
Dress Circle Premium	¥98,010	¥114,345	¥130,680	¥147,015	¥154,880	¥174,240
Dress Circle	¥68,970	¥80,465	¥91,960	¥103,455	¥116,160	¥130,680
Dress Circle Boxes*	¥45,738	¥53,361	¥60,984	¥68,607	¥75,504	¥84,942
Balcony Premium	¥58,080	¥67,760	¥77,440	¥87,120	¥91,960	¥103,455
Balcony	¥45,738	¥53,361	¥60,984	¥68,607	¥75,504	¥84,942
Balcony Boxes*	¥10,890	¥12,705	¥14,520	¥16,335	¥38,720	¥43,560
Family Circle Front	¥18,150	¥21,175	¥24,200	¥27,225	¥38,720	¥43,560
Family Circle	¥10,890	¥12,705	¥14,520	¥16,335	¥38,720	¥43,560
Family Circle Boxes	¥10,890	¥12,705	¥14,520	¥16,335	¥25,168	¥28,314

*一部席に見切れあり。

1 ドル=121 円で換算 (6 月 7 日現在)

メトロポリタン歌劇場 2007/2008シーズンの新制作一覧

作曲家	演目	初日	指揮者	演出	スタッフ	主なキャスト
ガエターノ・ドニゼッティ Gaetano Donizetti	ランメルモールのルチア Lucia di Lammermoor	2007年9月24日	ジェイムズ・レヴァイン/未定 James Levine/TBA*	Mary Zimmerman	美術 Daniel Ostling 衣裳 Mara Blumenfeld 照明 T. J. Gerckens 振付 Daniel Pelzig	Natalie Dessay, Annick Maass Marcello Giordani/TBA*, Giuseppe Filianoti Mariusz Kwiecien, John Relyea
ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi	マクベス Macbeth	2007年10月22日	ジェイムズ・レヴァイン James Levine	Adnan Noble	美術・衣裳 Mark Thompson 照明 Jean Kalman 振付 Sue Lefton	Andrea Gruber, Dimitri Pittas, Roberto Aronica Joseph Calleja, Zeljko Lucic, Lado Ataneli Carlos Alvarez, John Relyea, René Pape
クリストフ・ウィバルド・グルック Christoph Willibald Gluck	トーリートのイフィジエー Iphigénie en Tauride	2007年11月27日	ルイ・ラングレ Louis Langrée	Stephen Wadsworth	美術 Thomas Lynch 衣裳 Martin Pakledinaz 照明 TBA* 振付 Daniel Pelzig	Susan Graham, Plácido Domingo Paul Groves, William Shimell *シアトル・オペラとの共同制作
エンリコ・カステリ Engelbert Humperdinck	ハンセルとグレート Hänsel and Gretel	2007年12月24日	ウラディマー・ミルコフスキ Vladimir Jurowski	Richard Jones	美術・衣裳 John Macfarlane 照明 Jennifer Tipton 振付 Linda Dobell 英語版 David Pountney	Christine Schäfer, Alice Coote Rosalind Plowright, Philip Langridge Alan Held *オリンナル・プロダクションはウエルシユ・ナショナル・オペラ、シカゴ・リリック・オペラによる
ベンジャミン・ブリテン Benjamin Britten	ピーター・グラimes Peter Grimes	2008年2月28日	トナル・ラニョルズ Donald Runnicles	John Doyle	美術 Scott Pask 衣裳 Ann Hould-Ward 照明 Peter Mumford	Patricia Racette, Neil Shicoff/Anthony Dean Griffey Anthony Michaels-Moore
フィリップ・グラス Philip Glass	サティアグラハ Satyagraha	2008年4月11日	ダンテ・アンゾリーニ Dante Anzolini	Phelim McDermott	演出補・美術 Julian Crouch 衣裳 Kevin Pollard 照明 TBA*	Rachelle Durkin, Richard Croft Earle Patricio, Alfred Walker *イングリッシュ・ナショナル・オペラとの共同制作
ガエターノ・ドニゼッティ Gaetano Donizetti	連隊の娘 La Fille du Régiment	2008年4月21日	マルコ・アルミリアート/未定 Marco Armiliato/TBA*	Laurent Pelly	美術 Chantal Thomas 衣裳 Laurent Pelly 照明 Joel Adam 振付 Laura Scozzi	Natalie Dessay, Felicity Palmer Juan Diego Florez, Alessandro Corbelli Zoe Caldwell *ロイヤル・オペラ、ウイーン国立歌劇場との共同制作

*TBA = To Be Announced(未定)

メトロポリタン歌劇場 2007/2008シーズンのレパトリー作品

作曲家	演目	指揮者	演出	スタッフ	主なキャスト
ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi	アイダ Aida	大野和士 Kazushi Ono	Sonja Frisell	美術 Gianni Quaranta 衣裳 Dada Saligari 照明 Gil Wechsler	Maria Guleghina/Angela M. Brown, Dolara Zajack/Olga Borodina Marco Bertl, Andrzej Dobber/Juan Pons, Mark Delavan
ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi	仮面舞踏会 Un Ballo in Maschera	ジャンドレ・ノセダ Gianandrea Noseda	Piero Faggioni	美術・衣裳 Piero Faggioni 照明 Piero Faggioni	Michèle Crider/Angela M. Brown, Orla Sala/TBA* Stephanie Blythe, Salvatore Licitra, Dmitri Hvorostovsky/TBA*
ジョアキーン・ロッシ Gioacchino Rossini	セビリアの理髪師 Il Barbiere di Siviglia	フレデリック・ジャスラン Frédéric Chaslin	Bartlett Sher	美術 Michael Yeagan 衣裳 Catherine Zuber 照明 Christopher Akerlind	Elina Garanča, Michael Schade, Franco Vassallo Bruno Praticò, Maurizio Muraro, Peter Rose/Ruggiero Raimondi
ジャコモ・プッチーニ Giacomo Puccini	ラ・ボヘーム La Bohème	ニコラ・ルイソッティ Nicola Luisotti	Franco Zeffirelli	美術 Franco Zeffirelli 衣裳 Peter J. Hall 照明 Gil Wechsler	Angela Gheorghiu, Anihoa Arteta Ramón Vargas, Ludovic Tézier
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart	皇帝テイトの慈悲 La Clemenza di Tito	ハリー・ビケット Harry Bicket	Jean Pierre Ponnelle	美術・衣裳 Jean-Pierre Ponnelle 照明 Gil Wechsler	Heidi Grant Murphy, Tamar Iveri, Susan Graham Anke Vondung, Ramón Vargas, Oren Gradus
ジャック・オффエンバック Jacques Offenbach	ホフマン物語 Les Contes d'Hoffmann	エマニュエル・ヴィラウム Emmanuel Villaume	Otto Schenk(オリジナル・プロダクション) Lesley Koenig	美術 Günther Schneider-Siemssen 衣裳 Gaby Frey 照明 Wayne Chouinard 殺陣 B.H.Barry	Aleksandra Kurzak, Krassimira Stoyanova Nancy Fabiola Herrera, Sophie Koch/TBA* Marcelo Alvarez, Alan Held
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart	後宮からの誘拐 Die Entführung aus dem Serail	デイヴィッド・ロバートソン David Robertson	John Dexter	美術・衣裳 Jocelyn Herbert 照明 Gil Wechsler	Diana Damrau, Aleksandra Kurzak Matthew Polenzani, Kristinn Sigmundsson
ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi	エルナーニ Ernani	ロベルト・アバド Roberto Abbado	Pier Luigi Samaritani	衣裳 Peter J. Hall 照明 Gil Wechsler	Sondra Ratnavosky, Marcello Giordani Thomas Hampson, Ferruccio Furlanetto
タン・ドゥン Tan Dun	始皇帝 The First Emperor	タン・ドゥン Tan Dun	Zhang Yimou	美術 Fan Yue 衣裳 Emi Wada 照明 Duane Schuler 演出協力 Wang Chaoge 振付 Dou Dou Huang	Sarah Coburn, Susanne Mentzer Plácido Domingo, Paul Groves Hao Jiang Tian
セルゲイ・プロコフィエフ Sergei Prokofiev	賭博師 The Gambler	ヴァレリー・クルギエフ Valery Gergiev	Temur Chkheidze	美術 George Tsypin 衣裳 Georgi Alexi-Meskishvili 照明 James F. Ingalls	Olga Guryakova, Olga Savova Larissa Diadkova, Vladimir Galouzine Sergei Aleksashkin

作曲家	演目	指揮者	演出	スタッフ	主なキャスト
ジヤコモ・プッチーニ Giacomo Puccini	蝶々夫人 Madama Butterfly	マーク・エルダー Mark Elder	Anthony Minghella	演出補・振付 Carolyn Choa 美術 Michael Levine 衣裳 Han Feng 照明 Peter Mumford 人形 Blind Summit Theatre	Patricia Racette, Maria Zifcak, Roberto Alagna, Luca Salsi
ジヤコモ・プッチーニ Giacomo Puccini	マノン・レスカウ Manon Lescaut	ジェームズ・レヴァイン/未定 James Levine/TBA*	John Copley	美術・衣裳 Desmond Heeley 照明 Gil Wechsler	Karla Mattila, Marcello Giordani Dwayne Croft
Vincenzo Bellini	ノルマ Norma	マウリツィオ・ベニーニ Maurizio Benini	Jonathan Miller	美術・衣裳 John Conklin 照明 Duane Schuler	Franco Guleghina, Dolora Zajack Franco Farina, Vitalij kowaljow
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart	フィガロの結婚 Le Nozze di Figaro	Philippe Jordan	Elijah Moshinsky	美術 Peter Davison 衣裳 James Aheson 照明 Mark McCullough 振付 Terry John Bates	Dorothea Roschmann / Anja Harteros Isabel Bayrakdarian, Anke Yonduing Michele Pertusi / Simon Keenlyside Erwin Schrott / Bryn Terfel
ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi	オテロ Otello	セミュン・ビシュコフ Semyon Bychkov	Guy Joosten	美術 Michael Yeargan 衣裳 Peter J Hall 照明 Duane Schuler 振付 Eleanor Fazan 殺陣 B.H Barry	Renée Fleming, Johan Botha Carlo Guelfi
シャルル・グノー Charles Gounod	ロメオとジュリエット Roméo et Juliette	プラシド・ドミンゴ/未定 Plácido Domingo/TBA*	Franco Zeffirelli	美術 Johannes Leacker 衣裳 Jorge Jara 照明 David Cunningham 振付 Sean Curran 殺陣 Dale Anthony Girard	Anna Netrebko, Rolando Villazón Nathan Gunn, Kristinn Sigmundsson Robert Lloyd
ジュゼッペ・ヴェルディ Giuseppe Verdi	椿姫 La Traviata	マルコ・アルミリアート Marco Armiliato	Dieter Dorn	美術 Franco Zeffirelli 衣裳 Raimonda Gaetani 照明 Duane Schuler 振付 Maria Benitez	Renée Fleming / Ruth Ann Swenson Matthew Polenzani / Jonas Kaufmann Dwayne Croft
リヒャルト・ワーグナー Richard Wagner	トリスタンとイゾルデ Tristan und Isolde	ジェームズ・レヴァイン James Levine	Otto Schenk	美術・衣裳 Jürgen Rose 照明 Max Keller ドラマツルグ Hans Joachim Ruckhaberle 衣裳 Rolf Langenfass	Deborah Voigt, Michelle DeYoung Ben Heppner, Eike Wilh Schulte/TBA*
リヒャルト・ワーグナー Richard Wagner	ワルキューレ Die Walküre	ロリン・マザール Lorin Maazel/TBA*	Andrei Konchalovsky	照明 Gil Wechsler 美術 George Tsypin 衣裳 Tatiana Nogrnova 照明 James F. Ingalls 映像 Elaine McCarthy 美術補 Eugene Monakhov 振付 Sergei Gritsai	Matti Salminen Lisa Gasteen, Adrienne Pieczonka / Deborah Voigt Stephanie Blythe / Michelle DeYoung, Clifton Forbes James Morris
セルゲイ・プロコフィエフ Sergei Prokofiev	戦争と平和 War and Peace	ヴァレリー・ガルギエフ/ ジャン・ドレ・ノセダ Valery Gergiev / Giamandrea Noseda	Julie Taymor	美術 George Tsypin 衣裳 Julie Taymor 照明 Donald Holder 人形デザイン Julie Taymor, Michael Curry 振付 Mark Dendy	Irina Mataeva / Marina Poplovskaia Kim Begley, Vassily Ladyuk/TBA* Vassily Gerello, Samuel Ramey
ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart	魔笛 Die Zauberflöte	キリル・ペトレンコ Kirill Petrenko	Julie Taymor	美術 George Tsypin 衣裳 Julie Taymor 照明 Donald Holder 人形デザイン Julie Taymor, Michael Curry 振付 Mark Dendy	Diana Damrau, Anna-Kristina Kaspiola Eric Cutler / Joseph Kaiser Stéphane Degout, Eike Wilh Schulte Reinhard Hagen

*TBA = To Be Announced (未定)

MET ビューイング特別試写会

2007年6月13日(水)17:00~18:00

ジャコモ・プッチーニ作曲 〈3部作〉より《外套》

Giacomo Puccini: Il Trittico ~ "Il Tabarro"

指揮: ジェイムズ・レヴァイン

[Conductor] James Levine

演出: ジャック・オブライエン

[Production] Jack O'Brien

出演:

[Cast]

マリア・グレギーナ(ジョルジェッタ:ソプラノ)

Maria Guleghina (GIORGETTA: Soprano)

サルヴァトーレ・リチートラ(ルイーダ:テノール)

Salvatore Licitra (LUIGI: Tenor)

ホアン・ポンス(ミケーレ:バリトン)

Juan Pons (MICHELE: Bariton)

* * * * *

Stephanie Blythe (FRUGOLA), David Cangelosi (TINCA), Paul Plishka (TALPA),
John Nuzzo (SONG SELLER), Anne-Carolyn Bird, Tony Stevenson (YOUNG LOVERS)

提供: メトロポリタン歌劇場、松竹株式会社

【あらすじ】

セーヌ川に横付けされた伝馬船の船長ミケーレは50歳。妻のジョルジェッタはまだ若く25歳で、白髪交じりの自分との年の差も気になっている。ジョルジェッタは船荷労働者のルイーダと恋仲になっていた。妻の心変わり気づきながらも、ミケーレは、亡くした子供の話を話しながら、妻の愛を取り戻そうとうたえるが、彼女は彼の抱擁をすり抜けて、船室に降りていく。彼女が誰かを待っていると勘づいたミケーレは、夜風を防ぐために外套を着て、様子を見ながらマッチをすりパイプに火をつける。マッチの火は、ルイーダとジョルジェッタの逢引の合図でもあった。ルイーダはジョルジェッタからの合図だと勘違いし、急いで船に乗り込んでくる。ミケーレは、彼を捕らえると、喉元を締め上げながらジョルジェッタとの関係を告白させ、殺して遺体を外套でくるむ。妻はそれと知らずに、夫を苦しめたことを後悔しつつ、船上に現れる。ミケーレは外套をはぎとり、転がり出たルイーダの遺体に、ジョルジェッタの顔を押しつける……。

【みどころ】

プッチーニが1915年から18年にかけて作曲した〈3部作〉は、1918年12月14日、メトロポリタン歌劇場で初演された。〈3部作〉は、第1作《外套》、第2作《修道女アンジェリカ》、第3作《ジャンニ・スキッキ》から成り、それぞれが際立った個性をもつ1幕もののオペラである。その第1作、《外套》は、プッチーニがパリで観劇したといわれるディディエ・ゴルドの戯曲『外套』を原案に作曲された。《外套》ではセーヌ川の流れを思わせる主題が3拍子あるいは複合2拍子で多く現れて物語全体を貫き、叙情的な効果を上げている。

本日の映像は、2007年4月20日にプレミエを迎えたばかりの新制作を披露する。グレギーナほか豪華キャストの迫真の演技と歌唱、オブライエンのダイナミックでありながら繊細な演出は、作品の陰影に満ちた魅力を存分に引き出し、レヴァイン指揮の緊張感漲る演奏も聴き応えがある。高画質・高音質のライブ・ビューイングは、活力あるMETの現在形をあます所なく堪能できる。

出演者
プロフィール

プロフィール

ピーター・ゲルブ (Peter Gelb)

『ニューヨーク・タイムズ』紙の元編集長アーサー・ゲルブと作家バルバラ・ゲルブの間に生まれ、17歳より有名な興行主ソール・ヒューロックの事務所で働く。映画、レコーディング、ラジオ、テレビ、コンサート・イベント、オペラ、フェスティバルのプロデューサーとして多数の受賞歴を持ち、多くの世界的アーティストたちとコラボレーションしてきた。彼らの多くはゲルブの総裁在任中にメトロポリタン歌劇場に出演予定で、例えばジョン・コリリャーノ、タン・ドゥン、プラシド・ドミンゴ、ルネ・フレミング、ウイントン・マルサリス、リッカルド・ムーティ、小澤征爾、エサペッカ・サロネン、ジュリー・テイモアらが挙げられる。とりわけメトロポリタン歌劇場の音楽監督ジェイムズ・レヴァインとの密接な関係は20年におよび、レコーディングや映画『ファンタジア2000 *Fantasia 2000*』にも結実した。1992年には小澤征爾の〈サイトウ・キネン・フェスティバル〉のためにテイモアが初めてオペラ演出に取り組んだ《エディプス王 *Oedipus Rex*》の舞台版と映画版をプロデュース。また1994年の同フェスティバルのために、ロベール・ルパージュ演出《ファウストの劫罰 *Damnation de Faust*》を委嘱した。

また彼が1982年に設立したコロンビア・アーティスト・マネジメントの一部門であるCAMIビデオの社長として、メトロポリタン歌劇場のテレビ・シリーズ〈メトロポリタン・オペラ・プレゼンツ *The Metropolitan Opera Presents*〉のエグゼクティブ・プロデューサーを6年間務める。同社での制作数は全25タイトルで、中には1990年のレヴァイン指揮の〈ニーベルングの指環〉の全曲放送も含まれる。17時間の番組が、PBSで4夜連続で放送され（後にDVDで発売）、歴史に残るオペラ番組となった。CAMI在職中はヘルベルト・フォン・カラヤン、クラウディオ・アバド、ムスティスラフ・ロストロポーヴィチ、ヨーヨー・マ、キャスリーン・バトル、ジェシー・ノーマンといったアーティストが出演する50本以上の番組の制作や演出に関わる。彼の制作したテレビ番組はプライムタイム・エミー賞 (*Primetime Emmy Awards*) を13回受賞した。

エミー賞を受賞したフィルムは『音楽の兵士:ロストロポーヴィチ、ロシアに帰る *Soldiers of Music: Rostropovich Returns to Russia*』と『ウラディーミル・ホロヴィッツ:ラスト・ロマンティック *Vladimir Horowitz: The Last Romantic*』で、いずれもメイスルズ・フィルム *Maysles Films* と制作された。また4部作のテレビ・シリーズ『マルサリス・オン・ミュージック *Marsalis on Music*』(1995年)はピーボディー賞 (*Peabody Award*) を受賞。ジャズ・トランペット奏者ウイントン・マルサリスが、クラシック音楽とジャズの基本をふまえつつ、若い世代が楽しみながら音楽を体験するプログラムとして、日本でも大きな話題となった。2001年、彼は90分のドキュメンタリー『*Recording The Producers: A Musical Romp with Mel Brooks*』の共同演出と制作を行った。これはブロードウェイのヒット作品『プロデューサーズ』のメイキングに関するドキュメンタリーで、2002年のグラミー賞を受賞した。

1995年にメトロポリタン歌劇場に関わるまではソニー・クラシカル社長として、同社を著しい成長の時代に導いた。最も売れた映画の音楽作品をレコーディングするプロジェクトに力を注ぎ、ア

カデミー賞受賞作品『*Crouching Tiger, Hidden Dragon* グリーン・デスティニー』（タン・ドゥン作曲）、『*The Red Violin* レッド・ヴァイオリン』（ジョン・コリリャーノ作曲）、『*Titanic* タイタニック』（ジェームス・ホーナー作曲）などが知られる。一方、会社の伝統であるブロードウェイ・ミュージカルや、多くの世界的な演奏家のレコーディングも続け、他のクラシック・レーベルが過去数年間行わなかった、新作委嘱にも着手した。

彼の豊富な経験にもとづくプロデューサー的感覚は、1979年に世界中の新聞の見出しを飾った、文化大革命終盤に行われたボストン交響楽団の歴史的な中国ツアーのマネジメント、1980年のウラディーミル・ホロヴィッツの復活コンサートの成功、1986年、ホロヴィッツのソヴィエト連邦への歴史的帰国、香港の中国返還記念としてゲルブが中国政府と共同委嘱し、ヨーヨー・マも出演したタン・ドゥン作曲『交響曲 1997』初演のプロデュースにも表れている。

ゲルブのメトロポリタン歌劇場総裁の就任は2004年10月に発表。2005年1月から同劇場で仕事を始め、総裁を引き継ぐにあたり、メトロポリタン歌劇場の将来を計画するために、前総裁ジョセフ・ヴォルピー、音楽監督レヴァインらと密接に協力した。2006年8月に就任以降は、劇場レパートリー拡大のために、リュック・ボンディ、マシュー・ボーン、パトリス・シェロー、ヴィリー・デッカー、ロベール・ルパージュをはじめとする、現在、最も話題の演出家を多数起用し、新制作をそれまでの年間4作品から7作品にまで増やした。また現代の作曲家・劇作家への新作委嘱プログラムも積極的にすすめている。さらに観客拡大のために、世界中の映画館への高解像度生中継による公演配信「*Live in HD*」や、画期的な聴衆開発プログラムなど、多くの新しいプロジェクトを開始している。現在53歳。指揮者のケリーリン・ウィルソンとの間に2人の子どもがいる。

プロフィール

黒田 恭一（くろだ きょういち）

音楽評論家。

1938年生まれ。早稲田大学在学中から雑誌・新聞への執筆を始め、以後音楽専門誌のみならず、一般誌での連載を多数担当。FMやラジオ、テレビ等の音楽番組解説者としても活躍。現在はBunkamuraオーチャードホールのプロデューサーをつとめるなど、その活動は多岐にわたる。

クラシック・ファンの裾野を広げる活動に精力を注ぎ、幅広い層からの支持と信頼を獲得している。

主な著書に『オペラへの招待』（朝日文庫）、『はじめてのクラシック』（講談社現代新書）、『ぼくのオペラノート』（東京書籍）、『水のように音楽を』（新潮社）、『ぼくだけの音楽』（主婦の友社）、『ぼくのオペラへの旅』（JTB）などがある。

プロフィール

広渡 勲 (ひろわたり いさお)

1940年福岡市生まれ。

1959年福岡県立修猷館高校卒業。

1964年早稲田大学第一文学部文学科演劇専修卒業。郡司正勝教授に師事。

1964年早稲田大学卒業後東宝演劇部に所属。1965年－1966年ハワイ大学に1年留学。帰国後、菊田一夫の演出助手、また舞台監督として「ラ・マンチャの男」「オリヴァー」「スカーレット」「ファンタスティック」など帝劇開場時(1966年)のミュージカル公演を手がける一方、松本白鸚率いる「東宝劇団」の演出新装部(狂言作者)として、帝劇(新装こけら落とし)、国立劇場(三宅坂)開場公演など多くの歌舞伎公演にも参加、歌舞伎への造詣を深める。また、宝塚歌劇の東京公演にも舞台監督として参加。

1970年「アメリカン・バレエ・シアター」来日公演を機に、ジャパン・アート・スタッフに移籍。日本舞台芸術振興会(NBS)および傘下の東京バレエ団の制作プロデューサーとして「バイエルン国立歌劇場」「英国ロイヤル・オペラ」「ウィーン国立歌劇場」「ミラノ・スカラ座」「ベルリン・ドイツ・オペラ」「メトロポリタン歌劇場」「ベルリン国立歌劇場」「フィレンツェ歌劇場」「パリ・オペラ座バレエ団」「英国ロイヤル・バレエ団」「デンマーク・ロイヤル・バレエ団」「モーリス・ベジャール/20世紀バレエ団」「ボリショイ・バレエ団」など、世界の主要歌劇場やバレエ団の引越し公演の制作プロデューサー兼技術監督として、プロダクションとテクニカルの両面を兼任し、公演を成功へ導くとともに、長年にわたって指揮者のバーンスタイン、クライバー、ムーティ、メータ、バレンボイム、演出家のゼッフィレッリ、フリードリヒ、振付家のベジャール、ノイマイヤー、キリヤンからパントマイムのマルセル・マルソーまで海外の著名なアーティストやスタッフとの交流を深め、日本のスタッフの中では海外の主要劇場、主要バレエ団に最も精通しているプロデューサーといわれる。2002年NBS退社。

2003年～昭和音楽大学音楽芸術運営学科主任教授。

2004年～東京藝術大学講師。

2000年フランス共和国政府から「芸術文学賞シュヴァリエ」叙勲。

プロフィール

石田 麻子 (いしだ あさこ)

東京芸術大学音楽学部卒業後、ドイツの音楽出版・ショット社の日本法人に勤務。

東京芸術大学大学院音楽研究科修了。

昭和音楽大学オペラ研究所嘱託研究員を経て、昭和音楽大学准教授。

日本オペラ団体連盟発行『日本のオペラ年鑑』編纂委員。学術博士。

[著書]

『日本のオペラ作品』

[論文]

『オペラ公演からみた地域文化政策の一考察』

『日本の劇場運営におけるオペラ制作の課題』(共同論文)

『北九州市圏域の潜在的舞台観客層に対する効果的なマーケティング手法の開発』(共同論文)

『日本におけるオペラ公演の観客形成の一考察 —メディアとオペラ観客—』

プロフィール

井上 裕佳子 (いのうえ ゆかこ)

米国ニューヨーク州で育つ。エッジモント・ハイ・スクール卒業後、ジュリアード音楽院ピアノ科および同大学院を卒業。帰国後、サイマル・アカデミー(東京)で通訳を学ぶ。

以後、主にクラシック音楽関係の取材・記者会見において、ロリン・マゼール、ゲオルグ・ショルティ、ジェイムズ・レヴァイン、チョン・ミョンフン、ヴァレリー・ゲルギエフ、ヘルベルト・ブロムシュテット、ジョン=エリオット・ガーディナー、コリン・デイヴィス、フランス・プリュッヘン、アンドレ・プレヴィン、小澤征爾、シャルル・デュトワといった指揮者や、プラシド・ドミンゴ、ルチアーノ・パヴァロッチ、ホセ・カレーラス、キリ・テ・カナワ、ルネ・フレミング、バーバラ・ボニー、プリン・ターフェル、ホセ・クーラといった歌手、ヨーヨー・マ、ギドン・クレーメル、ミッシェル・マイスキー、ギル・シャハム、ハンナ・チャン、マルタ・アルゲリッチ、ウラディーミル・アシュケナージ、フリードリヒ・グルダ、イーヴォ・ポゴレリチ、ダン・タイ・ソン、リチャード・シュトルツマン、クシシュトフ・ペンデレツキ、といったアーティストの通訳をつとめた。

さらに、メトロポリタン歌劇場、ワシントン・ナショナル・オペラ、キーロフ・オペラ、ニューヨーク・フィルハーモニック、ロイヤル・コンサートヘボウ管弦楽団、サイトウ・キネン・フェスティバル、新国立劇場、東京フィルハーモニー交響楽団、NHK交響楽団、愛知万博 2005、東京のオペラの森、日本美術協会などでも通訳者として活躍している。

文部科学省特別補助「オープン・リサーチ・センター整備事業」

公開講座
オペラ劇場運営の現在・アメリカⅡ
メトロポリタン歌劇場の未来戦略
～メディアと劇場の融合

講義録

2007年12月17日発行

昭和音楽大学舞台芸術センター オペラ研究所

〒215-0004 神奈川県川崎市麻生区万福寺1-16-6

tel: 044-953-9858 fax: 044-953-6652

e-mail: opera@tosei-showa-music.ac.jp <http://www.tosei-showa-music.ac.jp/orc/>

©昭和音楽大学 禁複製・無断転載 非売品

